

<論説>日本洋学史：蘭学事始

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	49
号	2
ページ	1-63
発行年	2002-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/6135

日本洋学史

—蘭学事始—

宮 永 孝

オランダ語は、英語とおなじように、西ゲルマン語群に属する言語である。オランダ本国、ベルギー北部（フランドル地方）とフランス北部、南アフリカ共和国、インドネシアなどで用いられている。

対外交渉の視点からいえば、徳川幕府は寛永十六年（一六三九）から安政元年（一八五四）までの二百十五年間、鎖国政策をとり、朝鮮・中国・オランダを除く諸外国との通商、往来をいっさい禁じた。この間、西洋の文物はオランダを通じてのみわが国に伝えられた。

当時西洋文明について知識を得ようとするとき、オランダ語を手段とするしかなく、その学習の苦労はわれわれの想像を遙かにうわまわるものであった。

けれどそのころの蘭学者は、ただひたむきにオランダ語に励んだ。幕末に諸外国の船が日本近海に出没するようになり、物情騒然としてくると、海防の充実が叫ばれ、また西洋事情を知るうえからも、いっそう洋学（蘭学）に目がむけられ、にわかには蘭学熱がおこった。しかし、開港後、諸外国との貿易がはじまると、オランダ語に代わって英語の必要性が痛感され、やがてフランス語、ドイツ語なども勢力をえてくるに及んで、オランダ語はすっかり等閑に付された。

江戸時代を通じて、わが国で学ばれた西欧語のうちで、いちばん息が長かったのはオランダ語（蘭語）であり、慶長の初頭から幕末まで約二百五十年もつづいた。このオランダ語を手段としてヨーロッパの学術や文化を研究することを「和蘭学^{オランダ学}」といい、それを略し

て、

「蘭学」

と称していた。

大槻玄沢（一七五七～一八二七、江戸後期の蘭学者、蘭方医）の著書『蘭学階梯 乾』（天明三年「一七八三」の成稿）の「例言」に、蘭学を定義し、「蘭学トハ即チ和蘭ノ学問ト云」ニテ阿蘭陀ノ学問ヲスル「ナリ」とのべている。

蘭学は、ふつうオランダ語を通して、医学・天文・地理・兵学・画法・博物学・写真・印刷術・工芸・語学などについて学ぶことを意味する。が、ここではオランダ語学習の沿革を中心のべてみたい。

ポルトガルの商船が肥前国の平戸にはじめて来航したのは天文十九年（一五五〇）のことであり、ついでオランダ船が慶長十四年五月三十日（一六〇九・七・一）平戸港外に到着した。同十八年五月（一六一三・六）、ふたたびオランダ船が平戸に入港した。のちオランダ人は商館などを設け、商業活動をおこなった。一方、長崎が南蛮人（室町から江戸初期にかけて日本に渡来したポルトガル、スペイン人などをいう）のために開かれたのは、元龜元年（一五七〇）春のことであった。このときポルトガルの商船がはじめて深江（長崎の旧称）に來航し、その後定期的に訪れるようになった。

その後、長崎には鎖国時代に入るまで、主として交易を目的にポルトガル人、スペイン人、イタリア人、オランダ人、イギリス人といったヨーロッパ人のほか、近隣の国からは朝鮮人や、中国人が、さらに東南アジアの国々からはマレー人やタイ人などが来航した。

当時、極東における標準語（共通語）としていちばん用いられたのはポルトガル語であり、貿易商人にとって同語もしくはスペイン語の知識は、欠くことのできないものであった。商港にはかならず通弁（通訳）の役割をはたす者がいた。かれらは日ごろ外国人といちばん接しているうちに言葉をしぜんに覚えたものであろう。日本とオランダの貿易は、平戸においてはじまったのであるが、初期のころオランダ人との仲立ちをする通詞は、おもにポルトガル語をもって事務を処理するのがふつうであり、ポルトガル語やスペイン語をあやつる者は、わが国では南蛮通詞といい、オランダ語を取りつぐ者は蘭通詞、中国語や東京語、シャム語などを通訳する者は、唐通詞、東京通詞、シャム通詞などと呼ばれ、幕府の役職になっていた。

当初、通詞が職制となるまでは、通訳する者は日本人だけに限らず、外国人もいたようである。⁽²⁾ 日本における西欧語の学習と研究は、ポルトガル語やラテン語からはじまったのであるが、寛永十六年（一六三九）ポルトガル人の来航が禁止され、オランダ人と中国人だけが入国し、交易を許可されてからは、オランダ語と中国語（南京、福州、泉州の方言）だけがもっぱら学習された。

オランダ人以外の西洋人の渡来が途絶してからは、ポルトガル語、ラテン語、スペイン語といった言語の研究は漸次なおざりにされ、代わってオランダ語研究の勃興をみたのである。

平戸のオランダ商館が長崎の人口島（「出島」）に移されたのは寛永十八年（一六四一）のことだが、このときオランダ人といっしょに長崎へ移動した通詞（*tolk, taalmann*）や従前長崎にいた通詞のなかには、オランダ語よりもポルトガル語のほうをよく解する者がいたようである。

杉田玄白（一七三三—一八一七、江戸中期・後期の蘭方医）は、その最晩年に『蘭学事始』（文化十二年「一八一五」四月）を著わすのであるが、同書において日本人がオランダ語をはじめて学ぶようになった経緯にふれている。

○ 国初より前後、西洋の事に付ては、しかぐの事有て、総て厳しく御制禁仰出されし事ゆえ、渡海御免の阿蘭陀にても、其通用の横行の文字、読み書の事は御禁止なるにより、通詞の輩も只かた假名の書留等までにて、口づから記憶して、通弁の御用も并せしにて毎月を経たり、左ありし事なれば、誰一人横行の文字読習ひ度といふ人もなかりしなりき、……（蘭学事始^{上巻}）⁽³⁾

この文をやさしく現代風に訳すと、つぎのようになる。徳川幕府が創設される前後に、西洋のことについては、いろいろな問題があったので、すべてにわたってきびしい禁止令が出されていた。だから渡来を許されていたオランダでさえも、同国で通用している横文字（オランダ語）を読んだり、書いたりすることを禁じられていた。

そのため通詞といえども、ただオランダ語をカタカナで書きとめておくだけで、もっぱら口で覚えておいて、通訳の御用をつとめているうちに年月が経ってしまった。そのようなありさまだったので、だれひとり横文字を読み習いたいという者はいなかった。

このあとにつづく文章は、耳で聞き、口でかたる通訳法は、弊害をとまなうので、せめて通訳を職業としている者だけでもオランダ文字を習い、オランダ語の書物をよんでもよいといった許可をお上に願ひ出してみることにしたという。もし、横文字の学習の許可がおりれば、万事、オランダ事情もわかるし、またオランダ人からだまされても、これを問いただすこともできる。

そこで長崎のオランダ通詞（西善三郎、吉雄幸左衛門ほか一名）は、この旨幕府に懇望したところ、すぐ聞きとどけられたという。かくしてオランダ人が渡来するようになってから百年あまりで、はじめてオランダ文字を学ぶようになったということである。

しかし、日本とオランダの通交がはじまって百十余年、鎖国政策が実施されて八十年にもなるのに、長崎のオランダ通詞は、オランダ文が読めずにその職責を全うできたとは、とうてい考えられないことである。

鎖国下、横文字を読むことは、西洋事情や西洋文化に通じたり、あるいはキリスト教についての知識をうる懸念すらあったから、公認されるはずはなく、また秘かに手に入れた洋書を大っぴらにひもとくことははばかられたはずである。

けれど金銭がからむ大事な商取引に、耳口三寸の学（耳で聞き、口で語る）だけの通訳で用がとまるとまるはずはなく、『蘭学事始』の記述の信ぴょう性については、早くから研究者によって疑問が出されていた。

もとよりオランダ通詞にしても、学力のほうはかなり個人差があり、一様ではなかった。『オランダ商館日記』（蘭館日誌）から、通詞のオランダ語の学力についての関連記事をひくと、つぎのようになる。

（慶安二年）
一六四九年四月二日………新たな買^{コフ}弁^{バイン}は、ポルトガル語もオランダ語も話すことができない。

（明暦二年）
一六五六年十一月十四日………通詞の Scheseijmon（石橋左衛門）は、オランダ語をじょうずに話す平戸の Josseymon（別名 Brasman）を連れてきた。

（寛文二年）
一六六二年八月二十八日………バタビアからの風説書（News）を和訳し、一通は長崎奉行の黒川與兵衛に、もう一通は幕府に提出した。
（寛文五年）
一六六五年三月六日………小通詞の Niodajo が江戸参府に上ったが、当人はオランダ語をほんの少ししか話せず、通訳の用が足せなかった。
かれのオランダ語は、まったく知らぬも同然（gansch onkundig is）である。

(寛文十二年)
一六七二年二月十二日……オランダ商館から奉行所に提出される書類を、通詞が読めないの、商務員が代わりに読み翻訳してやった。⁽⁵⁾

通詞とは、言語が互いに異なるために話が通じないとき、双方のいうことを翻訳し、話を通じさせる役目になった人を意味するのだが、先にのべたように語学力は千差万別であったようだ。

オランダ通詞のばあい、商取引の通訳ばかりか、公文書や風説書の翻訳ができないと、本分を全うすることはとてもできない。通詞がオランダの文字の読み書きを知らない、ということはありえないことであり、ましてや幕府がそれを禁止したというのは信じがたく、それどころか幕府はオランダ語の学習を奨励し、その書物を読むことを勧めているのである。

このことは、寛文十一年(一六七二)九月晦附のオランダ通詞の「起請文前書」の中にみられるつぎのような文章を読めば明らかになるう。

一 私共儀、阿蘭陀通事役被仰付難有奉存候上は、弥無油断阿蘭陀詞稽古^{つかまづるべくしう}可^べ仕^{つかまつるべくしう}候、若^{もし}言葉不通儀候は、仲間として致吟味、常々精入可申事

一 阿蘭陀文字、南蛮文字書面の通、何様の儀にても無^{つづかうことなく}繕^{つくろ}有^あ体^{たい}に和解^{わけげ}(翻訳の意)可申上候事⁽⁶⁾

とくに後者の一条から、寛文年間オランダ語通詞は語学の学習に精励していたことはうたがいない。さらに正徳五年(一七二五)六月附の「阿蘭陀方通事法度書^{はつと}」の中に見られるつぎの一条、

一 大小通詞は不^{もつとおよばず}及^{およ}申^{くまけい}、口稽古^{くちけい}の者に至る迄、都て通詞は要用^{ようちう}(だいじ)な役儀に候、就中大小通詞は通弁能^{とくべん}致^{いた}し、或は阿蘭陀文字読書^{あらんたもんじよくしよ}し候等の儀共専用の事に候……⁽⁷⁾

注・傍点は引用者による。

をよむと、幕府はオランダ文字を読むことを禁じているところか、それを行なうよう勧めているのである。

したがって玄白の『蘭学事始』にみられる説は、事実の認識において誤りがあることがわかる。

『オランダ商館日記』の^(延宝六年)一六七三年十一月九日付の記述は、長崎奉行・牛込忠左衛門勝登(寛文十一年～延宝五年まで在任⁽⁸⁾)の命令により、十代の少年が数名、毎日商館におもむき、オランダ語の稽古をすることになった旨をしるしたものだが、これは、通詞がオランダ語を正式に学ぶことになったことを明かす貴重な記事である。

以下、原文を引き、訳文(大意)を添えてみよう。

Donderdagh

ordre van den Gouverneur
om een Japanse jongen duys
te leezen en schryfsen
9^{de} Comen d'tolcken ons bekent maeckend, dat den gouverneur gaet gevonden ende geordonneert hadde seeckere Japanse jongen van ontrent is 10 à 12 jaeren out dagelyck hier op het Eylandt te laeten comen om door een van't Comp^e = dienaeren in de Nederlantse taal mitsgaders int lesen en schryfen van deselve onderwesen te worden.⁽⁹⁾

注・このオランダ文は十七世紀のもの。いまのオランダ語とは綴字が異なる。

(大意)

「欄外」長崎奉行の命により、日本の若者たちは毎日、読み書きをまなぶ。

十一月九日(木曜日)。

通詞から来た知らせによると、長崎奉行は十歳から十二歳ぐらいの日本の少年を何名か、毎日出島に通わせ、商務員からオランダ語の読み書きを正式に学ぼう命を下した。

オランダ語を学ぶために出島に通った少年たちは、おそらく小通詞の子息たちであろう。エンゲルベルト・ケンペル（一六五一—一七二六、出島の医官）の『日本誌』によると、出島のオランダ人たちは、昼間給仕のために数名の少年を使用することが許されていたとい、乙名（町役人）のところには「使丁」の名称で登録されていた。⁽¹⁰⁾

ケンペルが、長崎出島のオランダ商館付の医師として来日したのは一六九〇年（元禄三年）のことであり、日本に二カ年滞在したのち、バタビア経由でオランダに帰るのであるが、当時長崎には「通詞」（Tsunsi）または「通詞衆」（Tsjunsi sin）と呼ばれるオランダ通詞が百二十三名いたと述べている。

通詞の数に入らない見習い通訳の少年たちは、つねにオランダ人たちの身边にあって、その雑用や給仕をしながら、耳からオランダ語を覚えることに努めたとおもわれるが、ケンペルによれば、まともにオランダ語が話せる者はひとりもおらず、いずれも多少ことがわかる程度であったようだ。

稽古通詞（Kenko Tsjusi）と呼ばれる本通詞の実子もしくは養子が、毎日出島にきては、オランダ語やポルトガル語をまなんでいたという。大通詞ともなれば、一応御用がつとまるほどの語学力はあったものと思われるが、ケンペルが日本にいた当時、その子息らの学力はじゅうぶんとはいえず、オランダ語を多く解さない者がほとんどであった。

オランダ語を学ぶために出島に出入りした通詞とその卵は、どのようにそれを学んだのか、教授法や学習方法についてはわからぬことが多い。が、通詞はオランダ語の初歩をまず「アベ、ブック」（A B Boek）とか「レッテル、コンスト」（Letter Kunst）などの小冊子で勉強したのち、「エンケル、ワールド」（enkel word “単語”の意）を数百ほど覚え、ついで「サーメンスピーラク」（samenpraak “会話”の意）オランダ語の作文、算術などを学んだとされる。⁽¹¹⁾

いずれにしても日本におけるオランダ語学習の源流をたどると、平戸や長崎にいた通詞たちがその開祖であり、新井白石、青木昆陽、前野良沢、杉田玄白その他が江戸方面においてオランダ語を研究し、蘭学勃興の端緒をひらくのは後年のことである。⁽¹²⁾

また通詞とはべつに、平戸や長崎の土着の者で、オランダ語やポルトガル語、あるいは中国語に多少通じていた人間もいたとおもえる。

長崎の通詞が、どのようにオランダ語の学習に手をそめて行ったかについては、大槻玄沢の『蘭学階梯 坤』の「修学」にややくわしい記事がみられる。その大要を記すと、つぎのようになる。

——長崎の訳官は、オランダ語を学びはじめるときは、まずABCの読み方、書き方、綴字などを学習し、そのあと「サーメンスプラーカ」といって、ふだんの談話（会話）を集めたものを習う。これらは通弁術を習いおぼえるとき、まず行なうべきことである。それを理解したのち、オランダ文の書き方を習い、わからないときは先輩や朋友に質問したり、ときにはオランダ人にも尋ねて正してもらう。右のような段階を経て学ぶのが本式の教授法であるが、長崎でないと本格的に学習できない。

幕府八代将軍吉宗（一六八四～一七五一、一七一六「享保元年」～一七四五年「延享元年」在位）の時代は、日本の洋学史上もっとも蘭学・医学・天文学などが発展した時代であった。とくに洋学が公然と奨励されて興ったのもこの時期であった。

幕府においても、四代将軍家綱（一六四一～一八〇）、五代将軍綱吉（一六四六～一七〇九）のころ、医師がオランダ書を読習するのを黙認⁽¹³⁾していたらしく、吉宗の時代を経て十代将軍家治（一七三七～一八六、一七六〇「宝暦十年」～一八六「天明六年」在位）の治世、老中・田沼意次の時代になると、洋学（蘭学）の研究に従うものがふえ、ひじょうに盛んとなり、ついに「解体新書」や「蘭学階梯」（初学者ためのオランダ語入門書）の出版をみたが、幕府の干渉をなんら受けることはなかった。

吉宗の御世、長崎のオランダ通詞・西善三郎（一七一七～一六八、享保二年～明和五年）は、出島のオランダ人から「コンストウワールド」⁽¹⁴⁾（Kunst-woordenboek）を借りだすと、その写本を三部もつくったが、これを見たオランダ人は、その精力に感心し、その辞典をあたえたという（「蘭学事始」⁽¹⁵⁾上巻）。

こういった精進ぶりは、やがて吉宗の耳に達したようだ。かれはまだオランダの書物を見たことがなかったので、なんなりと一冊差しだすように命じた。このとき将軍が見たのは、「図入の本」（一六六三年に商館長ヘンドリック・インダイクが献上したJ・ヨンストンスの動物書）であり、その精密な絵におどろき、その説明を読むことができたら有益であろう、江戸でもだれかオランダ文字を学び覚えたらよろう、といった。

そこで、つぎの二名が吉宗の内命でオランダ語をまなぶことになった。

御医師・野呂元丈のろげんじやう（一六九三～一七六一、江戸中期の医家・本草家）

御儒者・青木文蔵（一六九八～一七六九、江戸中期の儒者・蘭学者、書物奉行）

野呂は伊勢の人である。通称は源次といった。元文四年（一七三九）十月御目見医師に任用され、のちJ・ヨンストンの動物書（J. Jonstons: *Naaukeurige Beschrijving van de Natuur der Vier-Voetige Dieren Vissen en Bloedlooze Water Dieren, Kronkel-Dieren, Slangen en Draken*, 1660）⁽¹⁾を参府のオランダ人やオランダ通詞の協力をえて、解説し、「阿蘭陀禽獣虫魚図和解」（二巻）を著わした。

青木は江戸において魚問屋の子として生まれ、通称は文蔵といった。号は昆陽こんやう。京都の儒者・伊藤東涯とうがい（仁斎の子）について古学を学び、のち吉宗に認められ幕府に出仕。さつまいもの栽培を奨励し「甘藷先生」かんしょしやうとあだ名された。

野呂と青木のオランダ語は、長崎におもむいて学んだものではなく、参府のオランダ通詞から手ほどきを受けたもののようで、あとは自学自習によったものであろう。

吉宗からオランダ語学習の内命をうけた二人は、寛保元年（一七四一）ごろから、毎年春になると將軍に拝礼にやってくるオランダ人や通詞たちから、かれらのみじかい滞在中にオランダ語を学んだのであるが、公務多忙のためゆっくり学ぶというわけにはゆかなかつた。そこで数年かかって、ようやくオランダ語のアルファベットとつぎにかかげるような単語を学んだということである（「蘭学事始」^{上巻}）

ソン	日	マーン	月	ステルレ	星
ヘーメル	天	アールド	地	メンス	人
ダラーカ	龍	テキゲル	虎	ブロイムボーム	梅

これらの語にオランダ語をあてるとつぎのようになる。

Zon (日)	maand (月)	sterre (星)
hemel (天)	aarde (地)	mensch(mens) (人)
draak (龍)	tijger (虎)	pruimeboom (梅)
banboes (竹)		

ともあれ、この二人は当時江戸においてオランダ語を学びはじめた最初のひとであった。

のちに青木文蔵は、『和蘭貨幣考』『和蘭話訳』『和蘭文訳』『和蘭文字略考』(三巻)を著わした。かれの研鑽の成果は、前野良沢^{りやうたく}によって継承発展されてゆく。

前野良沢(一七二三〜一八〇三、江戸中期の蘭方医)は、豊前国(現・大分県)の人である。通称は良沢、俗称は蘭化^{らんか}といった。蘭化^{らんか}というのは「オランダの化物」の意である。中津藩奥平家の医官であったが、明和六年(一七六九)四十七歳のとき、発奮し、オランダ語学習をおもい立った。

蘭学を志した機縁をあたえたのは、淀藩の坂江鷗^{こう}という、隠遁生活に入っている人だった。同人は、ある日のこと、良沢にオランダ書の残篇をみせ⁽¹⁸⁾、これは読めないものだろうか、といった。当時、良沢はオランダ語の知識はまったくなく、その本を借りうけ、つくづくおもった。国はちがいがい、ことばが違っているといっても、おなじ人間が書いたものが分からぬはずはない。そこでひとつオランダ語を学んでみようと思った。

明和初年(一七六四〜七二)の春、良沢は杉田玄白のひきあわせによって、参府の大通詞・西善三郎と会ったおり、オランダ語を学

びたいということ述べたところ、相手からオランダ語を理解することはとてもむずかしいから、おやめになったほうがよい、と諭された。が、いつもオランダ語のことが念頭から去らなかった。

そのうちに、青木文蔵先生がオランダ学に通じていることを耳にはさんだ前野は、紹介を求めてその門人となり、『和蘭文字略考』（青木が著したオランダ語の入門書）を授かり、日夜熱心に同書によってオランダ語を学んだ。ときに良沢四十七歳。明和六年（一七六九）のことであった。師の青木昆陽は、良沢の「志^{こころざし} 厚^{キニ} 感^{かん}ジテ其^{その} 蘊^{うん}（奥）ヲ 尽^しテ 伝^{でん}」（『蘭学階梯 乾』）えたということである。

明和七年（一七七〇）、良沢は主君の奥平昌鹿公に請い、長崎に百日ほど遊学させてもらい、この間に大通詞の吉雄榎林らの訳官について一心にオランダ語を学び、青木先生からまなんだ蘭和对訳の単語集を復習訂正し、さらにそれを補足し、ようやく七百語ほどの単語をおぼえた。さらにオランダの字体や文章なども筆写し、オランダの書物も少し買ひもとめて江戸に帰った。

しかし、まだオランダ文の章句や構造をじゅうぶん理解できる学力はなかったので、ふたたび長崎に遊学し、通詞家に秘蔵されていたオランダ語の辞書（ピイテル・マリンの『蘭仏・仏蘭辞典』）や医学書を五、六冊ゆすりうけて江戸にもどった。

その後、たゆまず勉学に励んで六、七年もすると、疑問がとけ、オランダ文が読めるようになり、やがて訳筆をとるまでになった。

「歳月既^ニ六七年^ヲ 経^テ 豁然^{かくぜん} ヲ 自得^{スル} 所^{アリ} テ 始^{はじ}メテ 和蘭書翻訳ノ成業^ヲ 遂^ケ ラレシトナリ」（『蘭学階梯 乾』）

洋学の研究というからには、洋書がなくては何もできないのは当然である。徳川幕府は禁書政策をとり、とくに長崎に輸入される漢籍（おもにキリスト教関係書）に神経を使った。「禁書」というのは、ふつう「好書故事」巻七十四にみられる「耶蘇^{ヤソウ}ノ教書」を指している。

わが国にはじめて洋書をもたらしたのは、来航する外国船の乗組員や宣教師であり、やがてキリスト教が厳禁となり、宣教師が国外に追放され、鎖国が布かれてからは、一般民衆は洋書と接することがなくなり、せつかく身につけた外国語の知識も時の経過とともに消滅して行った。⁽¹⁹⁾

しかし、長崎の通詞だけは職掌から語学ができないと、仕事に支障があるので横文字や洋書と接することができた。もちろんオラン

ダ商館を通じて、洋書を仕入れたり、あるいは出島に勤務するオランダ人からそれをゆずってもらうときには、長崎奉行の許可を得る必要があったようだ。

長崎オランダ商館の取引帳簿などを分析して著わした山脇悌二郎の『長崎のオランダ商館——世界のなかの鎖国日本』（中央公論、昭和55・6）に、「書籍・学術用具」の章があり、この中で江戸時代に輸入されたオランダ書籍について論じてある。

以下、同書を参照しつつ、輸入洋書について話をすすめてみよう。

いったい江戸時代にどのくらいの数のオランダ書（蘭書）が輸入されたものか。その正確な冊数は明らかではないが、文化・文政・天保年間（一八〇四〜四三）から幕末期（一八六八）にかけて輸入されたのは数千冊、おそらく一万冊は超えるのではないかという。洋書は、自然科学系のものが大半を占めており、それらは幕府高官の注文に応じたものか、あるいは通詞たちのために輸入したものであるという。つぎにいつごろ、どのような洋書が長崎に舶載されたかを簡単に一覧表にしてみよう。

慶応〜寛文期（一六四八〜七二）……………おもに医書（解剖学書・外科書・本草書）と世界地図。

延宝〜寛延期（一六七三〜一七四八）……………ほとんど舶載がない。

宝暦期（一七五二〜一七六三）……………とくに通詞たちを対象にした輸入がふえる。宝暦四年（一七五四）には、フランソワ・ハルマの蘭

仏辞典、ビュール・マリンの辞典（仏蘭・蘭仏の上下二冊）、言語辞典（ラテン語を見出しにして
蘭訳したもの）、同七年（一七五七）にはドイツの医家ラウレンス・ヘイステルの外科書。同十三
年（一七六三）には、ドイツの学者ヨハン・ヒュプネルの蘭訳地理学書。

明和期（一七六四〜一七七二）……………明和元年（一七六四）には、ドイツの学者ヨハネス・ヤコブ・ワイツの医学辞典の蘭訳ならびに地
図帳、同二年には『自然科学入門』の医学辞典、同七年（一七七〇）には『ターヘル・アナトミア』
（ドイツの解剖学者ヨアン・アダム・クルムスの解剖学入門書の蘭訳）。

このように江戸時代の前半期にあつては、洋書が商品として多量に輸入されることはなく、ましてやそれを読む者も長崎のオランダ

通詞にかぎられていた。

蘭学は文化から天保（一八〇四～一八四三）にかけて社会に広まって行き、文化五年（一八〇八）には蘭学奨励の諭達（おふれ）が出るまでになり、それにともなつて洋書の輸入もふえて行つたよう²⁰だ。嘉永三年（一八五〇）九月、輸入されたオランダ書籍はすべてその書名を長崎奉行に届け出、その許可をえたものだけが販売をゆるされた。

安政六年（一八五九）七月、神奈川・長崎・箱館が開港され、貿易がはじまると、各運上所において検閲をうけ、許可をえたものが市中に出回った。

長崎においては、とくに通詞の子弟らは幼いときからオランダ語に親しみ、さらに出島に出入りし、オランダ人の用を弁じながら、生活を通してことばを覚え、さらに直かにかれらから指導を受けたのである。何事によらず、人間の智力には個人差があることだから、通詞の語学力にしても段差があつたとしても、いちがいにかれらの学力は低かつたとは決していえないのである。中にはひじょうにすぐれた者もいた。

長崎はオランダ語の学習にとって絶好の場所であつたが、その他の場所となると教える人なく、学ぶに学舎はなく、その困難は想像以上であつた。

鎖国時代、長崎のオランダ通詞はヨーロッパの学術研究の中心的存在であつた。かれらの本来の仕事は、通訳と商業上の用務を果たすことであつた。学問的研究は、公務の合い間にやる余技もしくは副業であつた²¹。

これに対して江戸においては、医業を専門とする者たちによって、ヨーロッパの解剖書の翻訳研究がくわだてられるに及んで、新たに学界が生まれた。翻訳と学術研究を目的とした医師たちの社中（仲間）は、前野良沢（四十九歳）を盟主（会長）とする、

杉田玄白（一七三三～一八一七）享保18～文化14、小浜藩の侍医

中川淳庵（一七三九～八六）元文4～天明6、小浜藩の侍医

桂川甫周（一八二六～八一）文政9～明治14、幕府奥医師

嶺春泰（一七四六〜九三〇延享3）寛政5、高崎藩の侍医）

烏山松園（伝記不詳）

桐山正哲（？〜一八一五文化12、弘前藩の侍医）

石川玄常（伝記不詳）

ら八名から成っていた。はじめ前野、杉田、中川ら三名ではじまった研究会は、しだいに仲間がふえ、八名になったのだが、かれらが読解したいとおもったオランダ書について述べてみたい。

小浜藩医の中川淳庵は、かねて本草学（薬用とする動植物などを研究する、中国古来の学問）やオランダの博物学（動植物、地質学などの総称）などに深い関心をもっていた。毎年、春になると江戸にやってくるオランダ人と通詞たちの定宿（江戸本石町の長崎屋）に出入りしていた。明和八年（一七七二）春のこと、中川はかれらの宿舎に行くと、通詞のひとり、ヨハン・アダム・クルムス著『ターヘル・アナトミア』（蘭訳・Tafel Anatomia, 一七三四年）とカスパルス・バルトリヌス（デンマーク人）『カスパリヌス・アナトミア』（Casparius Anatomia, 刊行年不詳）といった人体解剖書を二冊取りだしてきて、希望者があればゆずってもよい、といった。

中川は『ターヘル・アナトミア』の方を家に持ちかえると、同僚の杉田玄白にそれを見せた。当時、杉田はオランダ語を一字も読めなかったが、同書に添えられている内臓や骨格などの挿絵をみて、これまでに見たり、聞いたところのものといふに異なっている点におどろいた。

杉田家は、オランダ流の外科を専門としていたから、かれはわが家にもこのような本を本箱に備えておきたいと思った。しかし、そのころ杉田家はたいへん貧乏だった。その本を買い求める金がない。そこで藩の家老にたのみ、ようやく求めることができた。値については明らかでないが、相当値のはるものだったにちがいない。

杉田玄白が藩に買い上げてもらった『ターヘル・アナトミア』の正式の原書名は、つぎのようなものである。

ONTLEEDKUNDIGE
TAFELN,
Benevens de daar toe behoorende
AFBEELDINGEN

EN

AANMERKINGEN,

Waar in het zaamenstel des Menschelyken Lichaams,
en het gebruik van alle des zelfs Deelen
afgebeeld en geleerd word.

DOOR

JOHAN ADAM KULMUS,

Doctor en Hoogleeraar der Genees-en Natuurkunde in
de Schoolen te Dantzich, en Mede-Lid van de
Keizerlyke Academie der Weetenschappen.

In het Neederduitsch gebragt

Door

GERARDUS DICTEN,

Chirurgyn te Leyden

Te AMSTERDAM,

By de JANSOONS VAN WAESBERGE
MDCCLXXXIV.

(大意)

『解剖学表—図譜と解説付。人間のからだの構造とその部位の機能を描き説明したもの。ヨハン・アダム・クルムス著。同人はダンチッヒのドクトルにして大学教授。王立科学アカデミーの会員。オランダ語に訳したのは、ライデンの外科医ヘラルドゥス・ディクテン。一七三四年にアムステルダム・ヤンスゾーン・ファン・ワースベルヘ社より刊行。』

わたしは同書を東京大学総合図書館で見ることができたが、背とかどは皮であり、背文字は‘A. KULMUS ANATOMIE’となっている。東大本（一七三四年刊）は状態が良好である。本の大きさは、21.5 cm × 12.8 cm、厚さは3 cmである。本文は二四九頁、巻尾に付録が十数ページついている。名古屋大学医学部教授酒井恒の訳述『ターヘル・アナトミアと解体新書』（名古屋大学出版会）があるので日本語訳でよめるようになった。

この『ターヘル・アナトミア』のオランダ語訳こそ、杉田玄白がはじめて入手したオランダ語の本であった。やがてかれはこの解剖書を見ているうちに、同書にみられる図譜と実物とを照らし合わせてみたいとおもっていた矢先、願ってもない知らせが舞い込んだ。明和八年三月三日（一七七・四・一七）の夜のことである。町奉行曲^{まがり}_{あち} 渚^{しほ}甲斐守の家来で、得能^{とくのう}万兵衛という者から手紙がきた。それには、明日おかけ医師の何某というものが、千住の骨^こが原（現・荒川区南千住五丁目にある「小塚原回向院」の墓地があるあたり）で「腑分け」（解剖）をするので、もし覬^こ覬^このお望みがあれば、そちらへおいで下さい、といった文章がつづられていた。

玄白は同僚医師の小杉玄適（一七三〇〜九一）から、京都の西郊において師の山脇東洋（一七〇五〜六二、江戸中期の古方医）が、宝暦四年（一七五四）に刑屍を解剖したとき、お供をして覬^こ覬^こをおこなった話を聞いていた。玄白はかねてオランダの解剖書が図示しているものと、じっさいの臓器がどう違うのか、それを比較対照してみたいとおもっていたし、また東洋が著した『蔵志』（二巻、宝暦九年（一七五九）刊、日本で最初の解剖図誌）とオランダの解剖書のどちらが正しいか、この機会にぜひ調べてみようとおもった。

杉田は、腑分けに立ち会えとは、このうえもない幸運とばかり、こおどりして喜んだ。と同時に、千載一遇のこの好機をひとりじめすべきではないと考え、家業に熱心な中川淳庵、前野良沢をはじめ、だれかれと知らせを出した。

翌三月四日の早朝、待ちあわせの場所——浅草三谷町出口の茶屋に行ってみると、中川や前野をはじめ、その他の友人たちも来ていた。そのとき、前野は去年、長崎へ行った折に求めたものだ、といって『ターヘル・アナトミア』の本をふところから取り出して皆に見せた。杉田はその書物を見るや、先頃藩に買ってもらったものと同じの版本であることがわかり、これはまことに奇遇とばかり、お互い手をたたいて感激した。

そして前野は、長崎遊学ちゅうに聞き覚えたものだといって、その本を開くと、

「これはロング (long) といって、肺のこと、これはハルト (hart) といって心臓のことです。マージ (maag) というのは胃のこととで、ミルト (milt) というのは脾臓のことなのです」
と、図を指し示しながら説明した。

しかし、それらの臓器は、中国の漢方医学の書にみられる図とはまったく異なるものであったから、皆々じっさい原物を見ないうちは、どちらが正しいか判断がつかなかった。

その日の死屍（死刑囚の死体）は、五十歳ぐらいの京都生まれの老婦であった。あだ名を「青茶婆」（青ばんだ茶色の木綿の綿入れを着ていたらしく、本名は不詳）といった。

同人は、大罪を犯したために処刑されたのである。

その日、腑分けの仕事をするのは、虎松という者であった。けれどもかれは急に病気になったので、急きよその祖父だという九十歳になる者が代わりに行なった。かれはそれまでに数体解剖した経験があり、これは何、これはいである、と臓器を切り分けて説明した。前野と杉田は、共に携えて行ったクルムスの解剖書にある図とじっさい人体の各部位がまったく同じであることを知り、ただ驚嘆するしかなかった。

骨ヶ原の腑分けは、日本の医学史上における画期的な事件であった。前野、杉田、中川らは解剖にじっさい立ち会ったことにより、西洋医学の卓越性をあらためて認識した。杉田は、クルムスの解剖書の一部でも翻訳できれば、人体の内外のこともはっきりするし、治療をおこなううえで大きな利益になるだろう、という、前野は皆さんが読解したい希望がありなら、わたしはオランダ語の素地

がすこしあるから、それを種^{たね}にしていっしょに勉強してみましようといった。

その翌日、最年長の前野を盟主として、その家宅（奥平家の屋敷Ⅱ京橋区鉄砲洲新栄町七丁目）にあつまり、研究会が発足したが、一同クルムスの解剖書を前にすると、呆然^{ぼうぜん}とするだけで、櫓^うも舵^{かた}もない船が大海に乗りだしたような気がした。

このとき前野は四十九歳。杉田は三十九歳、中川は三十三歳であった。杉田はそれまでオランダ語のアルファベット二十五文字さえ習った経験はなかったが、A・B・Cからはじめ、ついで単語などを覚えた。そのころ会読の集まりのメンバーのうちひとりとして、まだしっかりとした辞引をもてはいなかった。当然のことながら、辞書なしでは、翻訳なぞなせる業ではない。前野だけが、長崎で求めたという簡単な小辞典（小冊子）のようなものを持っていた。

クルムスの解剖書の翻訳に着手するにあたり、三人はオランダ通詞の手を借りずに、読解しようとの固い決意でいたが、じっさい理解できるのは十のうち三ほどにすぎなかった。身体の各部分（目、口、鼻、眉^{まゆ}など）の訳語はだれもが知っていたので、はじめそこから訳しはじめ、そのあと本文に入っていた。

しかし、単語力や文法的知識に欠けていたから、容易に訳すことはできず、一ヵ月に六、七回ほど集まって、知恵を出しあっても仕事は遅々^{ちぢ}として進まなかった。わずか一、二寸（約三、五、六センチ）の短い文章を読むのに、丸一日かかることも珍しいことではなかった。推理を重ね、どうしても分からぬ所は符号をつけ、あとまわしにしたり、参向の通詞たちに質問したりした。一年ほども経つと、牛歩もだいが進歩し、一日に十行、またはそれ以上も読解できるようになった。

一日会して読解できたところは、その日のうちに杉田が早速漢文に訳した。かくして明和八年（一七七二）三月にはじまった会読は、一年半ほどで稿がなり、安永三年（一七七四）八月に『解体新書』となって結実した。

同書は本邦初のヨーロッパの解剖書の翻訳であり、本文四巻、附図一卷の五巻（五冊）からなる。各巻の巻頭にみられるのは、つぎの四名の名と分担箇所である。前野良沢の名は、どういうわけか見られないが、これは名を売ることをいたく嫌った良沢が、固く辞退⁽²³⁾したためであるらしい。

解体新書卷之一

若狹	杉田玄白翼	訳
同藩	中川淳庵鱗	校
東都	石川玄常世通	参
官医	桂川甫周世民	閔
東都		

ともあれ『解体新書』は、翻訳書出版の第一号であったから、出版のさいには幕府の忌諱にふれることをひじょうに恐れたという。そこで奥医師の桂川家を通じて大奥より將軍に非公式に献上し、ときの老中にも一部進呈し、さらに京の公家にも献上したが、さいわい何の差しさわりもなかった。

ところで杉田らが苦心のすえに完成した訳書の出来ぐあいだが、それは必ずしも忠実な翻訳ではなかった。原文を簡略化したり、原文にない語を添えたり、意図的な訳しおとしがあったり、原意とのずれが見られたり、いまなら悪訳の好例とみなされるかも知れない。けれどもかれらが悪条件の中で果敢に難事業にいどんで行った勇氣と辛苦は賞賛すべきものである。

従来、長崎あたりでは西洋学のことを

「蛮学」

などと称していた。

が、江戸においては、『解体新書』の訳業がきっかけとなって、「蘭学」という言葉が誕生すると、

「一滴の油いっぽうあぶらこれを広ひろき池水ちすいの内に点すれば散まんして満池まんちに及ふとや（『蘭学事始下巻』）」

とあるように、五十年ほどの間にそれが全国的に広まって行った。

しかし、愉快ではないのは、西洋学の本家を自認する長崎の通詞家であった。が、これがよい刺激となり、西洋の学術研究にはずみを与えた。

さらに日本ではじめて刊行された最初の蘭学入門書といわれる、大槻玄沢の『蘭学階梯』（乾・坤の二冊）の刊行により、蘭学は普及の度をふかめて行った。しかし、当時、蘭学の研究をもっとも阻害していたものは、よき蘭日対訳辞典と文法書がないことであった。そのためこの二つの出現がいちばん待望されたのである。

長崎のオランダ大通詞の西善三郎（一七一七～一七八八）は、晩年の明和年間にオランダ人ピーター・マリッ Pieter Marin の『蘭仏・仏蘭辞典』*Nederduitsch en Fransch Woordenboek*（何年版のものか明らかでない）を基に、蘭和辞典の編さんを企て、その「A B 二三韻」の序言まで訳したが、完成を見ないうちに病没した。その後、前野良沢も西善三郎の訳書（未定稿）を訂正して、蘭日辞典を作ろうとしたらしいが、これも未刊におわった。

因州鳥取藩の侍医に、稲村三伯（一七五八～一八一二）という人がいた。稲村は『蘭学階梯』をよんで蘭学を志し、江戸に出ると大槻玄沢の門人となった。⁽²⁵⁾ 稲村は大槻の塾で蘭学に励んでいるうちに蘭和辞典のないことの不便を身にしみて感じた。そこであるとき、師の玄沢にピーター・マリッの『蘭仏・仏蘭辞典』を翻訳することを勧めたが、大槻はその編さんにあたることを固辞した。

けれどじぶんが朋友の交わりをむすんでいる人に石井恒右衛門（もと長崎のオランダ通詞・馬田清吉）という御仁がおり、同人はいま白河侯（松平定信）に仕えていると語った。この石井という人は、明和八年（一七七二）に小通詞末席となったが、何らかの事情により職を辞し、天明六年（一七八六）江戸に出た。そして寛政四年（一七九二）白河侯の臣となった。⁽²⁶⁾

石井はかねてから、オランダ大通詞の西善三郎が果たさなかった蘭和辞典編さんの志しを、受けつぎたいとおもっていた。石井の素志を聞き知った稲村は、大槻の門人・宇田川玄隨、岡田甫説らを誘って石井の門をたたき、訳語を受けては筆記し、辞典編さんの仕事に打ちこんだ。

年ならずして石井は、主君のお供して白河に行くことになったので、稲村は師の大槻玄沢から、フランスワ・ハルマの『蘭仏辞典』*(Woordenboek der Nederduitsche Fransche Taalen, Dictionnaire Flamand et François, Amsterdam, Utrecht, 1729)* を借りだし、

Nederduitsche	
鍵	訳

それによって辞典の編さん続ける仕事を白井にたくした。白井はハルマの辞典を白河に持って帰り、日夜業に精をだし、ついに荒原稿をつくり、翌天明六年（一七八六）六月江戸にもどると、訳稿を稲村にさずけた。

稲村はその原稿をさらに安岡玄真らと校正し、歳月をへてひとまず完成した。稲村はフランス語を除き、オランダ語の単語六万四千余語を木刻活字²⁷とし、その右側に訳語を毛筆で書き入れる形にし、まず三十部（書名、「序」「例言」もない）ほどつくった。

のちに「ハルマ和解」とか「江戸ハルマ」と呼ばれた、この蘭日辞典は、寛政八年（一七九六）二月に完成した。が、辞書編さんの仕事に着手して、約十年後のことであつた。訳語は、宇田川榛斎（一七六九～一八三四、江戸後期の蘭方医）や稲村などが書き入れたものであるが、諸家を訪ね、各家がそれぞれ考えている訳語を聞き取り、それを参考にして記入したらしい。

稲村はのちに藩籍をはなれ、名を海上随鷗とあらため京都でくらしした。かれの門人に、山城の普賢寺村の住人で藤林普山（通称・泰助、一七八一～一八三六、江戸後期の蘭学者）というひとがいた。かれは「ハルマ和解」を抜粋訂正した、

「訳鍵」

と称する、簡略化した蘭日辞典（二巻）をつくり、これを百部限定で刊行した。

わたしは同辞典を早稲田大学中央図書館で見る機会にめぐまれたが、同大学にあるものは勝俣銓吉郎（一八七二～一九五九、明治から昭和期の英語学者、もと早大教授）の旧蔵本である。

「訳鍵」の大きさは、26 cm×17.5 cm、上巻の厚さは3.3 cm、下巻は3.9 cmである。上・下二冊（乾」と「坤」）からなり、上巻は一五八頁、下巻は二九四頁と「大西葯名」（薬名）三三頁からなる。勝保本の表紙は仮につけたもので、見開きの左右に前ページのような題簽が張り付けてある。各ページはタテの二段組みであり、二十一行からなる。一ページに四十二の見出しが入っており、収録語いは、二四二六七語である。

豊後日出藩の帆足万里（一七七八—一八五二、江戸後期の儒学者・理学者）は、四十歳を過ぎてからオランダ語の独習をはじめたが、そのとき唯一の手引となったのは藤林普山の『訳鍵』や五両で求めた『ハルマ和解』の蘭和辞典であった。とくに師匠につくことなく、豊後の片田舎でひとりで勉強する苦労は察してあまりある。

かれはそのときの状況をつぎのように述べている。——四十余にして西籍（西洋の書物—引用者）を得て、之を読む。寒郷善師（よき先生）無きに苦しみ、唯訳語に就きて搜索し、意（こころ）倦めば則ち止む。六—七年を積み、稍其の義に通ずることを得たり。⁽²⁸⁾

「ハルマ和解」は、二十冊本であり、大部なものであり、使いづらさや写本づくりに困難な点があり、そこで考えられたのは、この簡略版（二巻もしくは五巻）であった。

「訳鍵」に収録されている語いは、「ハルマ和解」の約半分ほどの二七四六八語であり、この辞典はよく利用されたものらしい。⁽²⁹⁾

ちなみに『改増補訳鍵』（安政丁巳新鐫—大野藩広田憲寛蔵梓）は、元治元年（一八六四）春に再刊されたものである。この蘭日辞書（18 cm×25.8 cm）は五巻本である。同書の「自序」によると、「訳鍵」は寛政八年（一七九六）に宇田川榛斎先生らが苦勞のすえ完成し、仲間にくばったものという。曰く。

——文化七年（一八一〇）、藤林普山らと謀り、旧本八万語あまりを三万語ほどに縮めて簡易版をつくり、それを篤学の士に提供したところ、世間の好評を博した。が、この辞典は部数もすくないうえに高価であったために、貧しい学徒には手に入らぬものであった。そのため貧乏書生は、安直かつ便利な書を得ようとした。

『和蘭字彙』（出島の商館長ドゥーフが編さんしたオランダ語日本語対訳辞典「九巻」、天保四年（一八三三）に完成。俗に「ズーフ・ハルマ」という）は申しぶんのないものだが、貧乏な学生にとって高根の花である。今回、編者は『和蘭字彙』をより所（典拠）とし、

『訳 鍵』	フランソワ・ハルマの『蘭仏辞典』
A ア	A, d'eerste letter van't ABC.
ABC jongen. z. m. 者ヲア 学ベ ブセ	A, la première lettre de l'Alphabet, ou de l'ABC. Naar de order van het ABC. Suivant l'ordre de l'Alphabet.
…ling. z. m, en v. 子ブラ同 童学上	AB boek, z.g. Un ABC. un petit livret ou l'on apprend l'ABC.
AAF. x. v. 轂スヲ軸女 穴通車名。	Abece jongen.z.m. Garçon qui apprend l'ABC.
…kh. bÿ ワ間失齣 セ遠機齣	Abeceling, z. m. en vc Een kind dat ABC
AAGie. z. v 女 名	leerd. Un enfant qui apprend l'ABC.
AAI, 呼実 詞	* Hy is noch een abeceling, of nieuwelings in de wetenschappen. <i>Il est encore apprenti, il n'est que fort peu arancé dans la connoi-ssance des choses.</i>
…jen. 詞スヲ我 ル愛子	AAF, Aafje. Een vrouwe naam. Eve. <i>Nom de femme.</i>
AAK. z. v. 船送物河ロ スヲニイ ル運テン	Aaf, z.v. of Ave van een rad. <i>Moyen d'une roue.</i>
…ster.z.m. 鵞	AAFSCH, zie Averegts.
…steroogen. z. v. イ疣鵞 冒目眼	AAG.
AAL. z. m. 鰻	AAGT, vrouwsnaam. <i>Agathe. Nom de femme.</i>
	Aagje, Aagt. Een vrouwe naam. <i>Agathe. Nom de femme.</i>
	Aagtappel of Aagjes appel. Zekere lekkere geele appel. <i>Espèce de capendu; sorte de pomme délicieuse, dont la chair est jaune & la peau d'un veugedtre rayé.</i>
	AAI! Ach! och [uitroeping.] Ah! hé! <i>Sorte d'exclamation.</i>
	Aaimy, wat pyn is dat! <i>Ah, guelle douleur!</i>
	AAK.
	AAK, z. v. keulsche Aak. Een flag van lastschepen op den Rhijn. <i>Sorte de long bateau qui monte & qui descend le Rhin.</i>
	AAKSTER, Exter, z.m. zie Exter. Aaksteroogen. zie Exterroogen.
	AAL, z.m. Een slag van visch. Anguille. <i>Sorte de poisson.</i>

『訳鍵』を増補し、初学者に同書を提供するものである。

いま参考までに、この『改増補訳鍵』の第一巻(A〜Fまで)の冒頭のページに載っている見出し語および語義とハルマの『蘭仏辞典』(一七五八年刊)の原文とを並置し、異同点についてすこし検討をくわえてみよう。

ハルマの『蘭仏辞典』の構成は、はじめに見出し語がABC順に来、ついで各単語の語意をあたえ、ときにオランダ語の例文をかかげ、そのフランス語訳も添えている。『訳鍵』は、見出しをすべて大文字とし、筆記体である。原書にある例文(用例)をすべて削除しており、また語義も必要最小限としている。辞引の生命ともいうべき用例をにかけていないため、大規模な「単語集」のような印象をうける。

このような蘭和辞典が、じっさいオランダ文を読んだり書いたりするとき、どの程度役立ったものか疑問である。

稲村三伯の蘭日辞典(「ハルマ和解」又は「江戸ハルマ」)のつぎに現れたのは、

「ゾーフ、ハルマ」

と呼ばれた辞典であった。

出島のオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ(一七七七―一八三五、一八〇三―一七在任)は、一七九八年(寛政十年)に書記として来日し、のち商館長に昇進したのであるが、ヨーロッパにおいてナポレオン一世による騒乱のために、本国とバタビアとの交通が絶えたので、長崎にオランダ船の入港はなかった。そのためドゥーフは帰国することができず、同地で十五年ちかくすごす破目におちいった。が、かえてこのためにわが国の洋学史のうえで大きな貢献をしたのである。

ドゥーフは出島に在勤中、日本語を学んだが、日本とオランダの相互理解をいっそう深めたり、通詞の語学力を強化するためにも蘭和对訳辞典の必要性を痛感し、新たに蘭日辞典の編さんを目指した。かれは文化八、九年(一八一二、一八一三)ごろより、通詞の吉雄権之助、中山得十郎らの助けを借りて、主としてフランソワ・ハルマの『蘭仏辞典』(第二版 *Nieuw Nederlandsch en Fransch Woordenboek, 2de editie, 1717*)に依拠し、蘭日対訳辞典をつくることをはじめた。

ドゥーフのこの難事業の中心的なメンバーである吉雄や中山は、のちに毎日出島に通うと、朝から晩まで商館に残って和訳するしごとで没頭した。それがいかに心身をすりへらす辛気しごとであったかを、中山は江戸にいるオランダ通詞・馬場佐十郎に送った手紙のなかで、「夜分帰宅^{つかまつり}仕^{つかまつり}候得は、とんと疲れ果て、何も家事手に付不申^{もうしん}」と語っている。さらにドゥーフの気根(根気)にいたっては、「とふとも、こふも、言語^{げんご}ニ絶^{ぜつ}候^{こう}」といっている。このさいこの一文こそ、ドゥーフがいかに辞書の編さんに熱心であったかを知

実に伝えるものである。

しかし、辞書づくりは、途方もない手間と時間がかかる仕事であるため、ドゥーフは初稿（一方にオランダ語、一方にローマ字で日本語を入れたもの）が成るや、それを長崎奉行に差し出し、誤りなどを訂正せられたいといい、さらに多数の通詞たちを動員して見出し語や訳語の書き入れ、校訂などに従事させたい旨を申請した。

長崎奉行・松山伊予守は、これを幕府に上申し、その許可をえると、つぎの十一名の通詞を辞書の編修に参加するよう命じた。

〔主任格——編集主幹〕

〔担当部門〕

小通詞

中山得十郎（のち作三郎）……見出し語の翻訳

小通詞並

吉雄権之助

〃

〔助手格——編集部員〕

小通詞並

西義十郎

〃

〃

石橋助十郎

〃

〃

名村八太郎

〃

小通詞末席

名村八十郎

執筆すなわち書き写し

〃

猪俣伝次右衛門

〃

〃

西甚三郎

〃

〃

植村作七郎

〃

〃

志築長三郎

〃

稽古通詞

三島松太郎

〃

(31)

これらの通詞たちは、文化十二年九月六日（一八一五・一〇・八）⁽³²⁾より、毎日出島の通詞部屋にあつまると、ドゥーフを助けて校訂膳写の仕事に従事した。

蘭和对訳辞書編さんの仕事は着々とすすみ、文化十三年（一八一六）九月から翌文化十四年六月までの間に、欠漏（抜けおち）はあ
るが一応AからTの部までおえた。

〔文化十三年〕											
九月……	Aの部		三冊								
	Bの部		(欠漏)								
	Cの部		一冊								
	Dの部		二冊								
十月……	Eの部		一冊								
	Fの部		一冊								
	Gの部		(欠漏)								
	Hの部		三冊								
	Iの部		一冊								
	Jの部		一冊								
十二月……	Kの部		四冊								
〔文化十四年〕											
二月……	Lの部		三冊								
	Mの部		三冊								
	Nの部		二冊								
三月……	Oの部		(欠漏)								
	Pの部		一冊								
	Qの部		一冊								
	Rの部		一冊								
	Sの部		四冊								
	Tの部		三冊								
四月……	Uの部		一冊								
六月……	Vの部		三冊								
〔文化十三年〕											
十一月……	Wの部		一冊								
	Xの部		一冊								
	Yの部		(欠漏)								
	Zの部		三冊								
十一月……	AAの部		三冊								
	ABの部		二冊								
	ACの部		一冊								
	ADの部		一冊								
	AEの部		二冊								
	AFの部		一冊								
	AGの部		一冊								
	AHの部		二冊								
	AIの部		一冊								
	AJの部		一冊								
	AKの部		四冊								

この蘭和辞典は、文化十四年（一八一七）ドゥーフが帰国の途につくまゝにすべて完成させるつもりであった。が、ことは予定どおりに運ばなかった。

同年七月四日（八・七）、待ちあぐんでいたオランダ船（「ド・フラウ・アガタ」号）と僚船「カントン」号が長崎に入港した。ドゥーフの後任の新商館長ヤン・コック・ブロンホフが、妻子を連れて来船した。ドゥーフは十一月三日（一二・一〇）帰航の船に乗って、

長崎を出帆するのであるが、辞書を完成させることはできなかった。

かれが帰国したのち、辞書掛の通詞たちはゆっくり編修の仕事をつづけ、天保四年十二月（一八三四・一）、ついにこの蘭和对訳辞典を完成させた。ドゥーフが文化八、九年（一八一二、一三）ころより、オランダ通詞たちの助力をえながら編さん事業に手をつけてから、完成にこぎつくまで、じつに二十三年もの長い歳月を要したのである。

空前絶後のこの辞典は、俗に

「ドゥーフ・ハルマ」

「道訳法児馬」

「長崎ハルマ」

「ゾーフ、ハルマ」

などと呼ばれている。

この蘭和对訳辞典（写本八冊）は、大部なものであるがずいぶん謄写も行なわれたようである。

わたしは早稲田大学中央図書館で、坪井信道（一七九五―一八四八、江戸後期の蘭医学者）の写本（八冊、18.5 cm × 27.5 cm、厚さは各巻にばらつきがあり一定しないが、約五センチほど）を見ることができた。Aの最初の見出し語をすこし写し取ってきたが、つぎのようになっている。見出し語はすべて筆記体であり、訳語は見にくいが、横書きの欧文に対してタテに書き入れている。

A

de eerste letter van het abc
トクヤや靴おだる書物

初学の者ヲ教ふる書

a b boek

アベセ順子 イロハ順を
いふが如し

abc als

na de ordre van het

A B C.

アベセを学ぶ者

abc jongen. z. m.

アベセを学ぶ童子

abc ling z. m. en v.

彼人へまだ学問ヲ入む

* hÿ is nog een abcling. of nieuweling in de
wetenschappen.

なでなる

aaf. aafie een vrouwe

婦人の名

naam.

車の軸を通す穴

aaf. z. v. af van een

婦人の名

rad.

果物の名 未詳

aagie, aagt. eene vrouws naam.

aagies appel. Zekere lekkene

geele appel.

嗚呼

aai! ach! ach!

嗚呼是へいかなる種であらう

aai mÿ wat pijn is dat

ぞレイン河にて物を運送する

aak, keulsche aak. z. m.

松

aakster exter. zie exter

aaster oog. Zie eyten oog

小鰻

aal. z. m Zekere vis.

鰻の尾を握る なし難き母を

✕ un aal bÿ den staart

するといふ意

houden. Spreek w.

Een vrouwe naam.

ちなみに勝 海舟(一八二三〜九九、幕末・明治期の政治家)は、筑前藩の蘭学者・永井青崖の門に入りオランダ語を学んだのであるが、弘化四年(一八四七)秋から翌年の秋にかけて、この『ゾーフ・ハルマ』の辞書を二部謄写した。⁽³⁴⁾

嘉永二年(一八四九)二月、佐久間象山(一八一〜六四、幕末の思想家、兵学者)は、同辞典の流布をはかり、『増訂和蘭語彙』と題するハルマの辞書の出版を願ひ出たが、許可されなかった。当時、洋学者を眼のかたきとする町奉行鳥居耀蔵のような右派の人物からいらまれて不許可となったものようだ。

また幕府の医官桂川甫周も家蔵の稿本を上梓しようとし、許可を求めたが、はじめなかなか許可がおりず、再度熱心に願ひ出てようやく許可をうるこ

ができた。桂川甫周は安政二年（一八五五）より刊行に着手し、弟甫策や門人たちに命じて、P・ウェーランドの辞書 (*Nederduitsch Taalkundig Woordenboek* door P. Weiland, te Amsterdam, bij Johannes Allart, MDCCIC のことか) その他の書によって校訂せ、安政五年（一八五八）五月に完成した。

この新辞典のことを、

『和蘭字彙』

という。

見開きの左側に、

安政乙卯新鐫
和蘭字彙
侍医法眼桂川甫周蔵梓

とあり、その右隣りに「例言」がくるが、すべて漢文で書かれている。東京外国語大学の蔵本は、全部で十七巻あり、各巻の厚さにデコボコはあるが、本の大きさは18 cm×26.3 cmである。

見出しは、原則として大文字である。『訳鍵』の場合とおなじように単語、類語、派生語は、すべて筆記体である。『訳鍵』の語義はタテに組まれているが、『和蘭字彙』ではヨコに入れている。前者との大きな違いは、後者では、ところどころにハルマの『蘭仏辞書』に見られる例文とその釈義がかかっていることである。

早稲田大学中央図書館蔵の同辞典は、上・下の二巻本である。上巻は(A-D、本の大きさは25.3 cm×18 cm、厚さ4.5 cm)、下巻は(25.3 cm×18 cm、厚さ5 cm)であり、奥付はついていない。

つぎにハルマの『蘭仏辞典』（一七五八年刊）の原文と『和蘭字彙』とを並置して、その違いをみてみよう。

A.	
A. de eerste letter van het abc.	
Naar de ordre van het abc.	「アベセ」順ニイロ
ab boek, z.g.	ハ順トイフカ如シ 「アベセ」ヲ書タル 事物幼学ノ者ニヲ シラエル母ナリ
abc jongen, z.m.	「アベセ」ヲ学ブ者
abclingen, z.m.en v.	「アベセ」ヲ学ブ童 子
* Hij is nog een abcling, of nieuwe.	彼人ハ一々学文 ニ入ハナアル
ling in de wetenschappen.	ハナテアル
aaf, aafje. een vrouwe naam.	婦人ノ名
aaf, z.v. ave van een rad.	車ノ軸ヲ通ス穴
aafsch, zie averegts.	
AAG.	
aagt, vrouws naam.	婦人ノ名
aagie, aagt. eene vrouwe naam.	婦人ノ名
aagtappel of aagies appel. Zekere lekkere geele appel.	果物ノ名 未詳
aai! ach! och.	嗚呼
aai mij, wat pijn is dat!	嗚呼是ハ如何ナル痛 デアラフツ
AAK.	
aak, z. v. keulsche aak. een slag van lastschapen op den Rhijn.	「ノイソ」河ニテ物 ヲ運送スル舢
aakster, exter, z. m. Zie exter.	
aaksteroogen. Zie exteroogen.	
AAL.	
aal, z. m. zekere vis.	
† Eenen aal bij den staart houden.	鰻 鰻ノ尾ヲ握ル
spreek w.	為シ難キ事ヲ為ルト イウ意
aal, aaltje, aletta. een vrouwes naam.	婦人ノ名

A, d'eerste letter van't ABC.	
A, la première lettre de l'Alphabet, ou de l'ABC.	
Naar de order van het ABC.	
Suivant l'ordre de l'Alphabet.	
AB boek, z.g. Un ABC. un petit livret ou l'on apprend l'ABC.	
Abecejongen, z.m. Garçon qui apprend l'ABC.	
Abeceling, z.m. en v. Een kind dat ABC leerd. Un enfant qui apprend l'ABC.	
* Hy is noch een abece ling, of nieuweling in de wetenschappen. Il est encore aprenti, il n'est que fort peu avancé dans la connoi-ssance des choses.	
AAF, Aafje. Een vrouwe naam. Eve. Nom de femme.	
Aaf, z.v. of Ave van een rad. Moyen d'une roue.	
AAFSCHE, zie Averegts.	
AAG.	
AAGT, vrouwsnaam. Agathe. Nom de femme.	
Aagje, Aagt. Een vrouwe naam. Agathe. Nom de femme.	
Aagtappel of Aagjes appel. Zekere lekkere geelee appel. Espèce de capendu; sorte de pomme délicieuse, dont la chair est jaune & la peau d'un veugèdre rayé.	
AA! Ach! och. [uitroeping.] Ah! hé! Sorte d'exclamation.	
Aaimy, wat pijn is dat! Ah, quelle douleur!	
AAK.	
AAK, z. v. Keulsche Aak. Een slag van lastschepen op den Rhijn. Sorte de long bateau qui monte & qui descend le Rhin.	
AAKSTER, Exter, z.m. zie Exter.	
Aaksteroogen. zie Exteroogen.	
AAL, z.m. Een slag van visch. Anguille. Sorte de poisson.	
† Een aal by den staart houden. Spreek woord. Tenir une anguille par la queue: c' est-à-dire, en façon de parler proverbiale, tenir le loup par les oreilles, etre fort embarassé.	
Boerenaal. kataal. Nebaal. Panaal. Puitaal. Quabaal.	
Snebaal. Zeeaal. zie en der Boer, enz.	
AAL, Aaltje, Aletta. Een vrouwe naam. Alette. Nom de femme.	

『増補改正訳鍵』にかかっている語義と『和蘭字彙』の語義とをつき比べてみると、後者が前者の語意を参考にしたと思える所もあり、例文などもかかっている点からも、『和蘭字彙』のほうが、辞書として一段と進歩をとげた印象をあたえる。

『訳鍵』にせよ、『和蘭字彙』にせよ、幕末期、蘭学をやる者は、いちどはそのいずれかの恩恵に浴したはずである。あえて蘭日辞典と称すべきものは、当時この二つをおいてなかった。

松本良順（一八三二〜一九〇七、幕末・明治期の医師、初代軍医総監）がはじめてオランダ語の手ほどきを受けたのは、天保元年（一八三〇）足立長鶴（一七七六〜一八三六、江戸後期の蘭方医）の塾においてであり、ついで深川冬木町の坪井信道（一七九五〜一八四八、江戸後期の蘭方医）の門をたいた。良順は医師・佐藤泰然の第二子であり、のち松本家に養子に入るのだが、朝坪井塾でオランダを学んだのち帰宅すると、同家の調剤をすませ、午後は代診をなし、四方に奔走した。

夜になり、行灯に灯をつけると、もっぱらオランダの医書を読んだ。辞書として利用したのは『訳鍵』であった、といい、この辞引は唯一のたのみの綱であった（蘭囀 自伝）。

福沢諭吉（一八三五〜一九〇一、明治期の啓蒙思想家）のばあいは、文政元年（一八五四）長崎のオランダ通詞（榎林家）や蘭方医（石川桜所）などについて、はじめてオランダ語の手ほどきを受け、安政三年（一八五六）八月大坂に出ると、緒方洪庵（一八一〇〜六三、幕末期の蘭学者・医学者）の「適塾」に入門した。のちいったん帰郷し、翌年ふたたび門下生となり、その後数年同塾で学び、さいごはその塾頭をつとめるまでになった。

「適塾」は当時、日本を代表する蘭学塾のひとつであり、その門に学んだ者の中から数多の英才が生まれた。この塾にあったオランダ書というのは、わずか十部ほどの医書と物理学書であったという。辞書といえるものは、三疊敷ほどの

「ツーフ部屋」

に、わずかに一部「ドゥーフの蘭日辞典」（『和蘭字彙』の写本六冊とオランダの原書の辞典（P・ウェーランドのもの）が一部あるのみであった。「ドゥーフの蘭日辞典」というのは、和紙にしておよそ三千枚、これを謄写することはひじょうに大儀なことで、容易なことではなかった。

蘭学生は、この辞典を「蘭学社会唯一の宝書として崇め」たということである。明日が会読の試験があるというその晩は、「ゾーフ部屋」の燈火がこうこうと輝き、五人、十人と学生が群をなして入ると、辞典を引きつつ勉強した。

この蘭和辞典を書き写すことが、書生の生活の種子になった。オランダ語を三十行ほど写すと半紙一枚十六文、そして日本文字（語義）を写すと八文、十枚ほど写すと二百四十文ちかくにもなり、それが三千枚となると数十両の大金になったという（『福翁自伝』）。長与専斎（一八三八〜一九〇二、幕末・明治期の医学者）は、肥前（長崎）の大村より大坂に出ると、「適塾」に入門し、のち長崎の精得館に入り、出島の医官ボンペより西洋医学をまなんだのであるが、大坂時代を回想して「肝腎の字書といえるのは塾中ただツーフ（すなわち『和蘭字彙』なり）の写本一部あるのみ」とのべている。

この辞典は、学生にとって杖とも柱ともたのむもので、「ゾーフ部屋」に備え置かれた。一冊たりとも他に持ちだすことは許されず、学生は立ち替り、入れ代わり、辞書がある狭い部屋に入ると、前後左右にひっぱりあいをして、字義の詮索をしたという（「松香私志」上巻）。

なお、これらの大型の対訳辞典以外に、つぎのようなものがある。

熊 秀英（森島中良）『蛮語箋―万国地名箋』

（寛政十年「二七九八」、一巻一冊、日本語にオランダ語を対訳したもの）

*奥平昌高『蘭語訳撰』

（文化七年「二八一〇」、五巻五冊）

大槻茂質『蘭訳梯航』

（文化十三年「二八一六」、二巻二冊、オランダ語の単語集のようなもの）

飯泉士讓撰『和蘭文典字類 前編』

（安政三年「二八四四」、一巻一冊、『和蘭文典』に出てくる単語のみを集めた、簡単な蘭日辞典のようなもの）

牧天 穆『蘭語通A B C D』

（安政四年「二八四五」、一巻一冊、簡単な蘭和辞典のようなもの）

高橋重威撰『和蘭文典字類 後編』

（安政五年「二八五八」、一巻一冊）

海西漁夫『改正阿蘭陀語』

（刊行年不詳、日本語にオランダ語を対訳したもの）

海西漁夫『和蘭熟語集 初編』

? 「和蘭熟語集」

? 「和蘭熟語」

(安政四年「二八五七」、一巻一冊)

(稿本、東京外国語大学附属図書館蔵)

(写本、早稲田大学中央図書館蔵)

この中でも注目すべきは、本邦初の日本語とオランダ語の対訳辞典(『蘭語訳撰』)である。この辞典は、豊前国中津藩主・奥平昌高によって文化七年(一八一〇)に江戸で刊行されたイロハ引きの日蘭対訳辞典(26 cm×18 cm、厚さ約2.3 cm、左側に三カ所鉋止め、五巻そろえ)である。七〇七二語の単語を収録している。

早稲田大学中央図書館は、同辞典の一卷(「イ」から「チ」まで)だけを架蔵している。表紙は濃紺色であり、だいぶつかれが見られる。中央よりやや上の方に題簽がみられ、それには

Nieuw Verzameld
Japans en Hollandsch
WOORDENBOEK

van i tot ti

とある。版式は二度摺^すをほどこし、匡郭^{きやうかく}野と訳語は製版で摺り、オランダ語と各部門の単語は木活字である。ちなみに(「イ」から「チ」)までの語彙を収録している早大本の第一ページをつぎに引いてみよう。

納日雷電乾

板橋異国巖巔市場同上湾

(伊)
(文天)

Ondergaande zon
Donder
Blexem
Noord weft

(理地)

Hout brug
Vreemde land
Rots
Top
Beurs
Handel plaats
Golf

*

オランダ文を正しく理解するには、文法の知識は不可欠である。オランダ文法を本格的に研究しはじめたのは、長崎のもとオランダ通詞志築忠雄（一七六〇〜一八〇六、号を柳圃という）である。

志築のもと姓は中野といい、安永五年（一七七六）養父孫次郎の跡をついで稽古通詞となった。が、翌年病気を理由にその職を辞し、中野姓にもどり以降研究生生活に入った。天文学や物理学の造詣がふかく、生前多くの著述を著わした。

おだやかで情に厚い性格であつたらしく、ましてや名声や利益にてん淡としていたらしい。ただ蘭学を好み、世事から身をひいて、閑居すること二十年にも及んだ（『六格前篇 全』）。

この中野柳圃は、ウィレム・シュウェル（一六五四〜一七二〇、イギリス系オランダ人）が著わした『オランダ文法』（*Nederduyche Spraak kunst*, 1708, 1712, 1733, 1756 版などがある）やビィテル・マリッなどの文法書などを研究し、その大要をまなんだ。かれは苦心の研鑽のすえ『和蘭詞品考』⁽³⁶⁾と題するオランダ文法書をつくった。

中野の門人ちゅう、いちばん文法に通じていたのは吉雄権之助、西吉右衛門、馬場貞由（佐十郎）ら三名であったという。⁽³⁷⁾馬場は語学の天才とされ、文化十一年（一八一四）九月「訂正蘭語九品集」（写本、一冊）を著わした。邦人が著わしたオランダ文法書の刊行は、文化五年（一八〇八）年ごろにはじまり、安政三、四年（一八五六、七）ごろそのピークを迎えた。いま刊行年順にそれらを一覽表にしてかかげてみよう。

【刊本】

馬場殿「貞由」	【蘭語冠履辞考】	（文化五年「一八〇八」、一冊）
藤林普山	【和蘭語法解】	（文化九年「一八二二」九月、上中下の三冊）
馬場佐十郎	【訂正蘭語九品集】	（文化十四年「一八一七」、一冊）
マートシカッペイ撰	【和蘭文典 前編】	（Grammatica of Nederduitsche Spraak Kunst, 一八二三年版翻刻、天保十一年「一八四〇」、一冊）
箕作阮甫	【和蘭文典 前後編】	（天保十三年「一八四二」、嘉永元年「一八四八」合冊もしくは二冊本）
箕作阮甫	【和蘭文典後編成句論】	（Syntaxis of Woordvoeging der Nederduitsche taal, 一八一〇年の翻刻、嘉永元年「一八四八」、一冊）
馬場貞由	【蘭語冠履辞考】	（安政二年「一八五五」、二冊、再刊）
遠田著明	【和蘭文典前編訳語箋 卷之二】	（安政三年「一八五六」二月、一冊）
ヘンデレッキ・ラヘケッス撰 大庭雪斎訳	【訳和蘭文語 前後編】	（安政三年「一八五六」、前編上中、後編上中下、五冊）
松本凌雲、竹内宗賢訳	【和蘭文典読法一・二編】	（安政三年「一八五六」七月、十月、二冊）
？	【和蘭語学原始 全】	（安政三年「一八五六」、一冊）
柳下元良、金子忠範	【新定和蘭文範 前編】	（安政三年「一八五六」、一冊）
？	【和蘭乙蘭土文範】	（安政三年「一八五六」、二冊）

飯泉士讓、高橋重威

【和蘭文典字類】

(安政三年「二八五六」、前後編二冊)

遠田著明訳

【和蘭文典訳語箋 初編】

(安政三年「二八五六」、二冊)

?

【新定和蘭文範 前編 全】

(*Rudiment of Gronden der Nederduitsche taal*, 安政三年「二八五六」八月、一冊)

小原亭之輔訳

【^(ゴラマヤカ)挿
訳俄蘭磨智科】

(安政三年「二八五六」八月、一冊)

?

【和蘭語学原始】

(*Eerst beginnselen der Nederduitsche Spraak kunst ter dienst der Scholen in Nederlandisch Oostindie*, 一八四四年版翻刻、安政三年「二八五

六」九月、一冊)

小川玄能

【窩蘭麻知加訓訳上巻】

(安政四年「二八五七」三月、一冊)

?

【訓点和蘭文典】

(安政四年「二八五七」、一冊)

?

【和蘭文典便蒙】

(安政四年「二八五七」五月、一冊)

公莊徳卿、窪田耕夫

【蕃語象胥】

(*Kraners' Woordentolk Werkort*, 一八五四年翻刻、安政四年「二八五七」八

月、二冊)

?

【^点訓和蘭文典】

(安政四年「二八五七」九月、一冊)

公莊徳卿、窪田耕夫

【洋学順知】

(安政四年「二八五七」、一冊、安政六年「二八五九」再刊)

高橋重威

【和蘭文典字類後編】

(安政五年「二八五八」、一冊)

【写本または稿本】

前野良沢

【和蘭訳箋】

(天明五年「二七八五」、一冊)

〃

【和蘭語文畧草稿】

(?、一冊)

中野柳圃

【和蘭詞品考】

(?、一冊)

〃

【蘭学生前文】

(?、一冊)

〃

【助詞考】

(?、一冊)

宇田川玄隨	「四法諸時対訳」	(?、一冊)
羽栗費(洋斎)	「蘭訳弁髦卷一・二・三・四・五」	(寛政五年「一七九三」、五冊)
志築忠雄	「六格 前篇」	(文化十一年「一八一四」、一冊)
馬場貞由	「蘭語九品集」	(文化十一年「一八一四」、一冊)
馬場貞由	「訂正蘭語九品集」	(文化十一年「一八一四」、一冊)
藤林普山	「和蘭文範摘要」	(文化十一年「一八一四」、一冊)
大槻玄幹	「和蘭語法解」	(文化十二年「一八一五」、三冊)
吉雄權之助	「訂正和蘭接統詞考」	(文化十三年「一八一六」、一冊)
?	「属文錦囊」	(文政四年「一八二二」、一冊)
?	「和蘭訳筌」	(?)
?	「和蘭文典和解」	(?)
馬場貞由	(ガランマチカ和解)	(?)
〃	「蘭語首尾接詞考」	(?、二卷一冊)
〃	「和蘭字類訳名鈔」	(?、一冊)
〃	「蘭字述」	(?、一冊)
?	「蘭字釀音捷法」	(?、一冊)
中野柳圃	「蘭語助辞解残欠」	(?、一冊)
	「蘭文法諸時」	(?、一冊)

いまかかげたオランダ語の文法関係の著作は、蘭学生によって利用されたことは言をまたない。日本において、日本人の手によって始めて編述・刊行されたオランダ語の文法書は、文化九年「一八一二」に上梓された藤林普山の『和蘭語法解』(三冊)である。

蘭学はもともと市井しせいの学者のあいだから興ったものであるが、やがて幕府はそれを採用し、また蘭学者たちも召し出されるようになって行った。⁽³⁸⁾

延享元年（一七四四）に幕府は、江戸蔵前片町に「天文台」（暦局）を創置した。そこに勤める役官は天文方てんもんかたといい、若年寄に属し、天文・測量・地誌などの研究のほか、外国書の翻訳などのしごとを担当した。文化八年（一八一二）「天文台」のなかに「蛮書和解御用」といった一局が設けられ、長崎からは馬場佐十郎（貞由）、江戸在住の蘭学者からは、大槻玄沢が訳官として採用され、公務がひまのとき、シヨメルの家庭百科辞典（「厚生新編」）の翻訳にたずさわった。

蘭学が幕府の公学になるに及んで、オランダ語の学習が国内に広まってゆくのであるが、天保十二年から安政三年（一八五六）にかけて、オランダ文典（原書）の翻刻本が刊行されるようになり、それらを教材としてオランダ語の学習が盛んにおこなわれた。

よく用いられたオランダ文典の翻刻本は、マートスハッピー（Maatschappij）やクラマース（J. Kramers）らが編んだものであった。

GRAMMATICA.
OF
NEDERDUITSCHES SPRAAKKUNST,
UITGEGEVEN DOOR DE
MAATSCHAPPIJ:
TOT NUT VAN 'T ALGEMEEN,
TWEDE DRUK.
Te LEYDEN, DEVENTER en GRONINGEN, bij
D. DU MORTIER EN ZON,
J.H. de LANGE EN
J.OOMKENS
MDCCCXXII

「右の大意」

マートスハッペイが編んだ一般むけの『オランダ文法』。第
二版。ライデン、デフエンター、フロニゲンにおいて。D・デ
ユ・モルティエ・エン・ゾーン、J・H・ドウ・ランゲ、J・
オームケンスの各社から一八二二年に刊行。
同書は17.8 cm×25.7 cm、厚さ約1 cmである。

天保十三年壬寅九月稟准刊行	GRAMMATICA OF NEDERDUITSCHES SPRAAKKUNST	和蘭文典 編 前	作州箕作氏藏版

奥付に、

安政四丁巳年七月
日本橋通二丁目
山城屋佐兵衛
江都書林 本石町十軒店
播磨屋膳五郎
浅草茅町二丁目
須原屋伊八
とある。

SYNTAXIS
OF
WOORDVOEGING
DER
NEDERDUITSCH E TAAL,
UITGEGEVEN DOOR DE
MAATSCHAPPIJ:
TOT NUT VAN 'T ALGEMEEN,
TE LEYDEN, DEVENTER EN GRONINGEN, BIJ
D. DU MORTIER en ZOON,
J.H. de LANGE, EN
J.OOMKENS
MDCCCX

「右の大意」

マートスハッペイが編んだ一般むけのオランダ語の統語論。
ライデン、デフエンター、フロニンゲンにおいて。D・デュ・
モルティエ・エン・ゾーン、J・H・ランゲ、J・オームケン
スの各社から一八一〇年に刊行。
同書は18 cm×25.7 cm、厚さ約1 cmである。

SYNTAXIS
OF
NEDERDUITSCH E
WOORDVOEGING

和蘭文典後編
成句論

作州箕作氏蔵版

嘉永元年戊申九月稟准

奥付に、

安政四丁巳年七月

日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

江都書林 本石町十軒店

播磨屋膳五郎

浅草茅町二丁目

須原屋伊八

とある。

**RUDIMENTA
OF
GRONDEN
DER
NEDERDUITSCH E TAAL,
UITGEGEVEN DOOR DE
MAATSCHAPPIJ:
TOT NUT VAN 'T ALGEMEEN,
1. STUKJE**

(COVER DE WOORDGRONDING)

VIERD UITGAVE

TE LEYDEN, DEVENTER EN GRONINGEN, BIJ

D. DU MORTIER en ZOON,

J. H. DE LANGE, EN

J. OOMKENS.

MDCCCXXVII.

〔右の大意〕

マートスハッペイが編んだ一般むけのオランダ語の基礎。第一部。(語形成について)。第四版。ライデン、デフェンター、フロニゲンにおいて。D・デュ・モルティエ・エン・ゾーン、J・デュ・ランゲ、J・オームケンスの各社から一八二七年に刊行。

同書は 17.8 cm × 25.8 cm、厚さ約 1 cm である。

安政三年丙辰八月稟准

新定和蘭文範

編 前

川越 柳下元良
金子忠範 同校

奥付に、

柳下元良校

安政三年丙辰八月

書肆

江戸芝神明前

和泉屋吉兵衛

とある。

NEDERDUITSCH
SPRAAKKUNST.

この見開の二ページの間に、つぎのように記されている。

Nederduitsche Spraak kunst, door P. Welland, uitgegeven in naam on op last van het staatsbestuur der Bataafsche Republiek. Nieuwe door den auteur zelve overzienne en verbeterde druk. Te Dordrecht, Bij Blussé en van Braam, 1839. この文章の大意は——バタヴィア共和国政府の名と命によってP・ウェーランドが編纂オランダ文法。作者自身が刪修した新版。ドルトレクトのブルッセ・エン・ファン・ブラーム社より一八三九年に刊行。

同書は18.2cm×26.5cm、厚さ1.3cmである。

安政丙辰新鐫

和 蘭
勿乙蘭土文範
初 篇

木村海藏蔵梓

奥付に、

木村海藏校正
安政三丙辰年

京寺町通松源
勝村治右衛門
大坂心齋橋北久太郎町
河内屋喜兵衛
江戸日本橋通二丁目
山城屋佐兵衛

とある。

*Eerste beginselen
der
Wederduitsche Spraakkunst
ter dienste der Scholen
in Nederlandsch Oost-indie*

*Saramang,
by Oliphant en comp.
1844*

〔右の大意〕

オランダ東インドにある学校で用いるためのオランダ文法の
第一歩。サラムングのオリファント・エン・コンパ社より一八
四四年に刊行。

同書は18 cm×26.7 cm、厚さ0.8 cmである。

紀元千八百四十四年刊

歡蘭語学原始

窩窩所徳温実学校利用

奥付に、

皇安政丙辰 季秋翻刻

とある。

いまかかげたものの中で、幕末に人気があり、よく教材として用いられた翻刻本は、箕作阮甫の、『和蘭文典 前後編 二巻』（前編は、天保十三年刊、後編は嘉永元年刊）であった。緒方の「適塾」では、入門した者は、まず同書の「前編」の素読と釈義を教わる。それがおわると「後編」に入るのだが、これも素読と釈義を教わる。

この二つを読みおえた者は、「会読」（輪講）のコースに入る。会読のクラスは、十名から十五名の学生から成り、先輩の教師が学生の訳読を聞きながら、その出来ぐあいをえん魔帳に白玉、黒玉をもってつける。会読の課程をおえると、あとは「専ら自身自力の研究に任せ」られたという（『福翁自伝』）。

赤松則良（一八四一〜一九二〇、明治期の海軍軍人）は、若いとき蕃書調所の句読教授（オランダ語）であった。かれは三十名ほどの稽古人（学生）を受けもったが、のらくら日を送っている者が多く、毎日授業に出て来なかった。だから出席者はひとりずつ、教師から一時間オランダ語を教わることができた。教科書は、教授方の箕作阮甫が翻刻した『和蘭文典 前後編 二巻』であったという（『赤松則良半生談』）。

わが国で唯一の洋学教育機関である「蕃書調所」（のち「洋書調所」「開成所」と改称）が、江戸神田小川町に開校したのは安政二年（一八五五）のことだが、翌三年ごろからオランダ語の文典が相ついで刊行されると相まって、オランダ語の学習が一段と活発になる。が、やがて時代の移りかわってゆくにつれて、英学、仏学、独逸学などが新たな外国語として注目され、それらが学ばれるようになると、オランダ語はかつての勢力を失い、やがては廃語同然になってゆく。

*

諸藩における蘭学

鎖国時代、西洋のことを学ぼうとすると、第一語学であるオランダ語の知識は不可欠であったことは言をまたない。諸藩の中には、逸早く蘭学を藩校の教科として取り入れていた所もあるが、何といっても蘭学普及の誘因となったのは、嘉永年間にペリーが率いる黒

船艦隊が来航し、開国を迫ってからである。

諸藩における蘭学はどのようなものであったのか、いまその概説を試みてみよう。

津輕藩が藩校「稽古館」(寛政八年創設)のなかに「蘭学堂」なるものを設け、蘭学を研究する道を開いたのは安政六年(一八五九)二月のことであった。同藩が蘭学を採用するにいたる直接の動機は、藩内の医療と蝦夷地の警備のためであったようだ。

津輕藩を代表する蘭学者としては佐々木元俊(一八一八〜七四、町医)がおり、かれは嘉永元年(一八四八)江戸にあり、杉田成卿(一八一七〜五九、江戸後期の蘭学者)の門に入り、蘭学をまなび、のち麻布に医業を営むかたわら蘭学の修業をつづけ、安政四年(一八五七)『蕃語象胥』(蘭々辞典の翻刻二冊)を私版で出した。また津輕藩からは『解体新書』の翻訳に参加した桐山正哲が出ている。

秋田藩の蘭学は、西洋画と砲術部門においてのみ交渉があり、見るべきものがないようだ。南部藩の蘭学は、医学との関連においてはじまり、文久二年(一八六一)に西洋医学学校(「日新堂」)が創設されるや、医学のほかオランダ・イギリス・フランスの語学・農学・物理学・博物学などが教授された。蘭学のほうは、日新館の総督・八角宗律が教鞭をとった。

米沢藩からは、藩医・堀内忠意(林哲)、宮崎元良、高橋桂山(一七七四〜一八三〇)らの蘭学者が出ており、堀内と宮崎は寛政元年(一七八九)に江戸に出ると、大槻玄沢の「芝蘭堂」に入門し蘭学をまなび、高橋は長崎に遊学し医学とオランダ語を学び、蘭方医となった。⁽³⁹⁾

諸藩における蘭学の発達を阻害していたものは、蘭学に対する偏見や無理解であったとされる。⁽⁴⁰⁾が、東北諸藩の蘭学研究に関して異彩を放っているのは仙台藩の蘭学である。同藩における蘭学の研究は、明和・安永年間(一七六〇〜七〇年代)の工藤平助(一七三四〜一八〇〇、江戸後期の医家、経世家)や林子平(一七三八〜九三、江戸後期の経世家)らの地理学研究をその端緒とし、寛政・文化期(一七九〇〜一八一〇年代)に大槻一家の蘭学者がつづいて出るに及んで本格化した。⁽⁴¹⁾

大槻玄沢(名は茂質^{しげたけ})は、仙台藩の洋学の先駆者であったばかりか、日本の蘭学の発達にもっとも貢献した一人である。大槻の蘭学の師匠は杉田玄白、前野良沢であり、のち両師の各一字をとって、「玄沢」と称した。天明五年(一七八五)長崎に約半年遊学したの

ち江戸にもどった。翌年仙台藩侍医となった。寛政元年（一七八九）六月、本材木町に家塾「芝蘭堂」をひらいた。同年から文政九年（一八二六）にいたる三十六年間に玄沢の門にまなんだ数は九十四名を数えた。⁽⁴²⁾

大槻玄沢の名を不朽にとどめたものは、オランダ語の入門書『蘭学階梯』（天明三年「一七八三年」成稿）である。同書は日本における西洋語学書刊行の端緒を開いたばかりか、この書を読み蘭学を志し、大槻の門をたたく者も少なくなかった。蘭学史上の大槻の業績は、幕命をうけてオランダ書の訳述（フランス人ノエール・ショメールが編んだ家庭百科全書の蘭訳——『厚生新編』）に従ったことであり、また『解体新書』の校訂や語学書の刊行にひっ生の力を尽したことである。

仙台藩の藩校（「学問所」）を「養賢堂」と公称するようになったのは安永元年（一七七二）七月のことである。もともと養賢堂で講じられた教科は、漢学、武術・習字・算術・礼法などであった。文政四年（一八二二）に「蘭学方」の一科が設けられ、ここにおいてはじめて洋学の講究がはじまった。⁽⁴³⁾ 翌五年二月、すでに独立していた「医学館」に蘭方科が置かれたため、仙台藩の蘭学研究の中心は一時医学館に移った。

仙台藩の蘭学は、大槻玄沢を開祖とするのだが、同藩からはすぐれた蘭学者が少なからず誕生した。たとえば、大槻玄沢、馬場佐十郎、桂川甫賢の門に学んだ佐々木仲沢（のち「医学館」の助教となる）、蘭医・吉田長叔、馬場佐十郎などについて医学やオランダ語を学んだ小関三英は、天保六年（一八三五）は天文台の訳官となり、ショメールの「厚生新編」の翻訳に従事した。

佐々木、小関について蘭方医として現れたのは、榎林重兵衛についてオランダ語を学んだ木村寿徳、カスバル外科を修めた猪股松順、仙台におけるロシア学の創始者として名をなした小野寺丹元、シーボルトの鳴瀧塾に学んだ大槻俊斎（一八〇六〜六二、のち幕府の「種痘所」の頭取）、伊達安芸の家臣・赤坂圭斎や白石の蘭学者・可野亮などがある。赤坂はドイツ人J・N・イスフォルディングの『理学初步』の蘭訳を訳述し、可野は『和蘭辞典』（ゾーフ・ハルマと「訳鍵」とを校合し、両者の長所をとって作った簡易版、未完）や『蘭学独案内』（オランダ文法書、上下の二冊本）などの著述がある。⁽⁴⁴⁾

幕末期、水戸藩は海防や軍備の充実をはかるために⁽⁴⁵⁾ 蘭学の導入をはかり、反射炉をつくり、鋳砲をおこなったが、藩校「弘道館」では蘭学を教授することはなかった。

佐倉藩にはじめて蘭学（オランダ医学）らしいものが這入ってきたのは寛政二年（一七九〇）のことであるらしい。時の藩主正順は、吉雄耕牛（一七二四〜一八〇〇、江戸中期のオランダ通詞、医師）の門人・樋口保貞（のち司馬と改めた）を藩医として召し抱えたとすにはじまる。天保九年（一八三八）四月、藩医・鑄木仙安は藩主より西洋書の研究を命じられるや江戸に出て箕作阮甫の門に入りオランダ語を学んだ。翌天保十年十月、藩医・西淳甫も同様の命をうけた。天保十二年（一八四一）樋口と西の両名は、藩命により一年あまり長崎に遊学し、オランダ語や西洋医学を勉強した。かれらが西洋学修業を命じられたのは、当時外国船が日本近海にしきりに出没し、海防兵備のうえからも洋学の必要が感じられたからである。

天保十四年（一八四三）八月、江戸両国の薬研堀で開業と家塾（「和田塾」）を開いていた佐藤泰然（一八〇四〜七二、幕末・維新期の蘭方医）は、藩主正睦に客分として招かれ佐倉に移ると、町医となり佐倉本町に「順天堂」を開業した。これは佐倉における蘭学興隆の基となった。

佐倉藩の蘭学は、藩主の命により藩医がオランダ医学の研究をおこなったことにはじまったのだが、同藩は文政六年（一八二三）以来、房総海岸の警備を命じられており、蘭学導入のもう一つの理由が洋式の砲術を採用することにあったことはいまでもない。

福井藩の蘭学は、安政四年（一八五七）四月に橋本左内（一八三四〜五九、幕末期の志士）が藩校「明道館」内に「洋書習字所」（定員三十名）を付設したことに始まる。橋本は嘉永二年（一八四九）の冬、大坂の適塾に入門し、二年数ヶ月まなびさらに安政元年（一八五四）江戸に出ると、坪井信良・杉田成卿・市川斎宮らから広く洋学や医学を習得した。

嘉永六年（一八五三）洋学の教導掛として、

江戸の蘭医……坪井信良（済世館医学所教授兼洋学教授）

藩医……真下宗三（洋学句読師）

町医……宮永欽哉（ ）

“……魚住順方（ ）”

らが任命された。⁽⁴⁹⁾ 幹事・学監であった橋本はまもなく江戸に召し出され、坪井、真下も江戸に引きあげると、蘭学の教授にも支障が起きるようになった。

安政の大獄により、藩主松平慶永が隠居謹慎を命じられ、橋本もまた捕えられ、江戸伝馬町の獄で斬られるに及んで洋書習字所は不振となったが、細々と命脈をたもち明治維新を迎えた。わが国の語学の気運は英学にむかっており、蘭学はその後自然消滅する運命にあった。

大野藩は、弘化元年（一八四四）四月、「明倫館」を創設すると、同年五月蘭学世話役に吉田拙蔵を任じ、生徒の教育と翻訳研究にあたらせた。さらに十二月、緒方洪庵の高弟・伊藤慎蔵を招き、同人を主任教授とし、さらに藩士西川貫蔵、山崎譲らこれを助けさせた。⁽⁵⁰⁾

翌弘化二年（一八四五）五月、「洋学館」が新たに開設されるや、広く門戸をひらき他国人も入学できるようにした。蘭学関係の大野藩の大きな貢献として自然科学の訳述書のほかに、『改正増補訳鍵』（大野藩士・広田憲寛撰、安政四年刊、五冊）や『英吉利文典』（安政四年刊、ファン・デル・ペイル著の翻刻）などがある。

広島藩の蘭学は、藩主浅野長訓（一八一二〜七二）が、ペリー艦隊の来航以来、洋学を導入しようと計画を立てたことにはじまる。しかし、蘭学の教授をはじめるにしても、しっかりとした教師がいなくては着手できない。が、安政三年（一八五六）十月にいたり、下間良弼いう者を三人扶持で採用して蘭学生の指導にあたらせたが、同人は文久二年（一八六二）七月病死したために頓挫をきたした。ついで文久三年六月、三刀立寛という賀茂郡仁方村の農医を五人扶持で医師として取りたて蘭学を教授させたが、元治・慶応と時代が変わるにつれて蘭学は急におとろえ、英学や仏学に取って代わられるようになった。広島藩が「洋学所」のち「修道館」を開設したのは明治二年（一八六九）三月であり、そこでは航海測量・漢学・洋学（英語、フランス語）などを教授した。⁽⁵¹⁾

松江藩の蘭学の起源はふるく、藩主松平治郷の時代——寛政のころ（一七八〇〜九〇年代）からすでに江戸藩邸を中心に蘭学の研究がはじまった。藩士萩野信敏は大槻玄沢や朽木昌綱（一七五〇〜一八〇二、円波国福知山藩主、蘭学者）と親しく交わり、また藩儒園

田雄は桂川甫周について蘭学をまなんだ。松江藩の蘭学がいちばん活況を呈したのは治郷の孫の松平斉貴の時代であり、同人はオランダの器械類（時計、電信機、噴水器など）に異常な興味をもち、ひろく藩士らに蘭学を奨励し、天文・測量・砲術などを学ばせた。

斉貴は、若くして長崎で蘭学をまなんだ金森建策を藩士にとりたて砲術と医学を研究させた。間宮繁之丞（のち観一と改名）は、金森の指導のもとに蘭学に熟達し、文久二年五月、蕃書調所教授手伝に拔擢された。布野^{ふの}雲平（出雲今市の医師）は、嘉永四年（一八五一）三月緒方の適塾に入門し、オランダ語と医学を学んだのち江戸に出ると、浪人ぐらしをしていたが、藩主斉貴にその才を認められ、藩士に取り立てられた。

布野はよほどオランダ語にひいていたものか、万延元年（一八六〇）二月、蕃書調所教授手伝として出仕し、のち師匠の金森のあとを引きついで、江戸藩邸で蘭学や英学を講じた。教授方手伝としてかれを助けたのは間宮観一であった。⁵²

山口藩は幕末の危局にあたり、海防の充備を第一とし、大いに文武を奨励し、さらに洋学を導入し、陸海軍の創設につとめた。とくに同藩の兵制改革をゆだねられ、兵学校教授となったのは村田蔵六（のち大村益次郎、一八二四～六九、幕末・維新期の兵制家）であった。

村田は弘化年間（一八四四～四七）緒方の適塾にまなび、その卓越した語学力をもって塾頭にまでなり、嘉永三年（一八五〇）郷里に帰り医業をひらいた。ペリー来航後、宇和島藩に迎えられ、西洋の兵書の翻訳や軍艦製造などを指導したのち江戸に出ると、蕃書調所や講武所などに出仕した。かたわら蘭学塾を開き、西洋の兵学などを教授した。

元治元年（一八六四）山口藩に兵学校教授として呼びもどされ、以降軍政面の指導者となった。兵学校の生徒は、はじめオランダ式の兵術のけいこをしていたが、のちイギリス式をも兼学することを命じられた。⁵³

佐賀藩の蘭学は、藩主鍋島直正^{なほまさ}（閑叟^{かんそう}、一八一四～七二）が、天保十四年（一八四三）十二月に伊東玄朴（一八〇〇～七一、幕末・維新期の蘭方医、のち幕府の奥医師）を、翌弘化元年（一八四四）七月に藩医・大石良英を招へいして蘭学の振興をくだてたことに端を発しているといわれる。⁵⁴佐賀藩は地理的にも長崎にちかく、寛永十八年（一六四一）以来、長崎の警備を命じられていたから、対外的関心もふかく、西洋文化に接する機会も多かった。

天保五年（一八四三）七月、佐賀城下八幡小路に「医学寮」（のち「好生館」と改称）が設けられ、ここで漢方医学と併行してオランダ医学を教えたようである。「医学寮」はのち廃校になり、嘉永四年（一八五二）に「医学校」なるものが改めて創られ、その付属施設として

「蘭学寮」

が設けられた。

この学校は、佐賀の城下から一里余郊外の中折の地にあったもので、藩校「弘道館」の学生のなかから十五名から二〇名をえらび、オランダ語とともに蘭書によって鋳砲・砲術などを学ばせ、さらにそこから海軍の研究へと発展していった。

蘭学寮に入った生徒は、マートスハッペイの『和蘭文典前編』をまず習い、それをおえると後編の成句語に進み、この二冊を学習するに約一カ年要した。⁽⁵⁵⁾これらの文典の教え方であるが、まず一語を発音し、その意味をいい、そのあと文章全体の通釈を施したようである。要するにいままでいう訳読であった。

オランダ語の文法をおえたのち、物理や数学などの原書を学ぶのであるが、蘭書は高価なうえ数が少なく、それを謄写して写本をつくるしかなかった。またゾーフの辞典（全十四冊）は一部あるだけであり、学生はオランダ書の解読にはひじょうに不便を感じた。

備後国福山藩主・老中阿部正弘（一八一九〜五七）^{まじひろ}は、幕末期欧米列強の開国要求といった国難に遭遇し、難局打開に腐心する一方で、諸大名との協調政策をとり、幕府の独裁制を改め、公武の合体をはかったり、大船建造の禁を解いたり、封建体制を維持しつつも現状の改革に着手した。

かれは列強との国力の差をうみ出した科学技術を摂取するために、⁽⁵⁶⁾当時急速に広まりつつあった蘭学に注目し、藩校「誠之館」の学科——漢学・国学・医学・数学・習字・礼法・軍法——に、蘭学を加えた。

坂上下安と寺地強平は、家塾において蘭学を教授していたが、誠之館に「洋学寮」が設けられると、その蘭学教師となった。誠之館は、明治五年（一八七二）に廃校になるまで、わずか十九年しか存続しなかった。明治三年（一八七〇）には学制改革がおこなわれたが、すでに蘭学の時代はおわりを告げており、それに代わって英語とフランス語を学ばせた。

土佐藩の蘭学については、詳細はわからない。同藩は慶応二年（一八六六）、新たに藩校「開成館」を高知城の東南——鏡川の中之島中央の丸反田に設立した。機構は貨殖・観業・鉾山・捕鯨・海軍などの諸局にわかれ、別局として「訳局」というのがあり、そこでは英語やフランス語の教授がおこなわれた。中浜万次郎などは訳局方の教授として英語をおしえた。

「医局」は当初は漢方であったが、やがて洋式（オランダ医方）に移って行った。ここではオランダ書を訳述して、生理・解剖・薬剤などを教え、おわりにはオランダ文典、理化学に至る傾向にあったという。⁽⁵⁷⁾すでに洋学は、蘭学の域を脱皮し、英語に転換していた。いったいどのくらいの数の日本人が、幕末まで蘭学を学んだものか、その実体はわからないが、一説によると、江戸・京都・大坂・長崎で合わせて約二千名、これに諸藩の学生を合わせると、優に三千名を超えるという。⁽⁵⁸⁾

*

私塾の蘭学

諸藩が藩校などのカリキュラムの中などに蘭学を取り入れたのは、海防や軍備の充実を図るためであった場合が少なかった。一方、民間においても蘭学が普及するようになり、それは「私塾」といった形をとった。いま江戸および京阪における主な蘭学塾の形勢をみると、つぎのようになる。

「江戸」とその近郊

（塾の名称）

（塾主）

（開業年および開業地）

安懷堂のち日習堂……………坪井信道—信良

文政十二年（一八二九）、深川冬木町八幡裏

天真楼塾……………杉田玄白

安永五年（一七七六）、浜町？

芝蘭堂……………大槻玄沢

天明六年（一七八六）、本材木町

? 高野長英
?
戸塚静海

象先堂……………伊東玄朴

和田塾……………佐藤泰然

迎翠堂……………土生玄碩

順天堂……………佐藤泰然

〔名古屋〕

洋学館（自邸内）……………伊藤圭介

〔京都〕

順正書院……………新宮涼庭

〔大垣〕

好蘭堂……………江間蘭齋

〔大坂〕

蘭方眼科の塾……………高良斎

適塾または適々斎塾……………緒方洪庵

天保元年（一八三〇）、麴町貝坂

天保二年（一八三一）、茅場町

天保四年（一八三三）、下谷

天保九年（一八三八）、薬研堀

?
天保十四年（一八四三）、佐倉

天保十二年（一八四一）、名古屋

天保十年（一八三九）、南禅寺畔

?

天保七年（一八三六）、?

天保九年（一八三八）、瓦町に開きのち過書町に移転

蘭学の初期において、杉田玄白や大槻玄沢らが、それぞれ門人を取り蘭学の教育にあたったことは周知のことである。世間に名を知られた蘭学者は、自宅に弟子をとって蘭学を教えるのが一般的であった。先にかかげた私塾は、いずれも有名なものであるが、その多くは内弟子または通学生をとって教育にあたっていた。

森鷗外が最初に結婚したときの義父であった赤松則良（一八四一〜一九二〇、明治期の海軍軍人、男爵）は、安政年間、江戸の蘭学塾でオランダ語を学んだ。かれははじめ英語を学ぶつもりであったが、当時江戸に英語を教える所がなかったので、深川冬木町にある

坪井信良の塾（「日習堂」）に入門した。

赤松は十五歳の春から塾がよいをするのであるが、そのころの蘭学塾は、塾主みずから教えるのではなく、塾頭もしくは先輩の塾生が教えたと言っている。「日習堂」のばあい、通学生が五、六名、その他二十五名ほどの書生が三十畳敷の部屋で起居していたという。塾生は概してなまけ者が多かった。

塾生は、大広間の教場のところどころに一団をなして机をならべ、夜ともなると種油たねあぶらのランプをともし、鼻の孔を黒くして学んだ。月に何回か講釈や論議があった。赤松によると、その当時オランダ語を学ぶ者の大半は、医者志望であり、組屋敷（与力、同心などの組に与えられた屋敷）の武士はほとんどいなかったという。初歩の教科書としては、エスポルチングの生理学、ヤンキー・ヘンキーの窮理問答書などを用いたと言っている（『赤松則良半生談』）。

幕末期、日本の二大蘭学塾といえば、

「順天堂」塾

「適塾」

であった。塾のよしあしは、ひとえに代稽古する塾頭によって価値が定まった。

適塾のばあい、オランダ書を読むことが中心であったのに反して、順天堂ではオランダ語学習のかたわら、医術をじっさいに研究した。この点、他の蘭学塾と趣を異にしていた。だから順天堂は「医学塾」といってもよく、外科においては日本一と称せられた（石黒忠憲『懐旧九十年』）。

嘉永五年から安政三年（一八五二―五八）ごろ、順天堂に学んだ山内六三郎（提雲）（一八二六―一九二二、幕臣、維新後鹿児島県知事、製鉄所長官）がしるした塾生活によると、当時この医学塾には、つぎのような課程があったという。⁽⁵⁹⁾

一 オランダ文典稽古

二 訳書および原書による医学講義と学習

三 内科の治療または外科手術の助手となる、または傍観する

オランダ文典は、マートスハッペイの翻刻「和蘭文典 前・後編」を用いたようだ。先生の講義は、解剖学・生理学・病理学・内科・外科に関するものであった。⁽⁶⁰⁾

塾生がいちばん困難を覚えたのは、書物の欠乏であった。順天堂にあった辞典といえば、

ゾーフ・ハルマの写しが一部

「訳鍵」(二冊)

かな書きの「薬名辞引」(完本ではない)

「病名辞引」(完本ではない)

などであり、また洋書は少なく、教材に使う原書を雁皮紙(ガンプの繊維からつくった薄く上質の和紙)などに謄写するしかなかった。写す作業たるやひどいような精力を要した。辞書は語学の勉強に不可欠であるが、ゾーフ・ハルマや訳鍵などを用いながら、三人五人額をあつめて研究して読むといった次第で、その努力の労はじつに想像以上であったという。ときどき江戸の書肆「長崎屋」に舶来のオランダ書が入ると、順天堂に通知がきたから、財力に余裕がある学生はそれを求めるために、佐倉から江戸まで十二里ある道を腰に大刀をさして徒歩でかけた。⁽⁶¹⁾

*

幕末にはオランダ語の入門書のようなものが何種類か刊行されているが、写本を含めてそれらをつぎにかかってみよう。

大槻茂質述 「西洋発微」

(文政五年「二八二二」、三都発行書林)

牧 蔵 「諸蛮学字韻考」

(安政二年「二八五五」、凹斎蔵梓)

柳河春三 「洋学指針」

(安政四年「二八五七」、千里晋行、明治元年に東京本町四丁目上州屋惣七より再刊)

添谷銀治郎 「西字発蒙」

(安政四年「二八五七」、京三条通堺町出雲寺文次郎他)

? 「和蘭文字早読伝受」
はやよみでんじゆ

全 (慶応二年「二八六六」、折り本、大阪心斎橋通安堂寺町秋田屋太右衛門書林)

「刊行年不詳のもの」

〔外大〕

松涛可能 「蘭学独案内」

(下学堂蔵梓)

〔早大〕

? 「改正阿蘭陀語」

? 「西洋武功美談」

(一八四五年にハーグで印刷したオランダ陸軍の学校用の読本を長崎で復刻したもの)

〔早大〕

「写本」

? 「和蘭訳文家伝」

〔早大〕

? 「和蘭文字読法」

〔〃〕

? 「蘭学輯」

〔〃〕

日本における蘭学がピークに達したのは安政年間であるが、やがて諸外国との貿易が盛んになるにつれて、新たに英語、ドイツ語、フランス語などが脚光を浴びて登場するようになった。中でも貿易商にとって不可欠な言語として英語が注目的となり、前面に出てきた。

明治五年(一八七二)には、英・独・露など四カ国語の辞典、文法、会話、発音などの解説書(入門書)が、百点ほどせきを切ったように巷にあふれ出た。けれどオランダ語関係のものは数点をかぞえるのみであった。時代はすでにオランダ語から英語へと移行していたのである。

維新後、各国語の対訳辞典が逐次刊行されてゆく中で、オランダ語の辞書だけはいっぞ出版されることはなかった。辞書といえるものが刊行されるようになるのは大正十年代に入ってからである。

いま大正から平成にかけてわが国で刊行されたオランダ語関連の辞引をかけると、つぎのようになる。

日蘭通交 編纂
調査会

【蘭和辞典—附蘭語文法要録】

(日蘭通行調査会、大正10・9、17.3 cm×9.5 cm、厚さ約3.6 cm)

ファン・デル・スタット編

【実蘭和辞典】

(南洋協会、大正11・8、昭和17・12再刊、8.8 cm×15 cm、厚さ約2.7 cm)

ファン・デル・スタット編

【日蘭辞典】

(南洋協会、昭和9・12、17 cm×12.7 cm、厚さ4.5 cm)

拓殖大学 南親会編

【蘭和大辞典】

(創造社、昭和18・6、18.7 cm×12.5 cm、厚さ5.3 cm)

朝倉純孝著

【蘭日辞典】

(明治書院、昭和19・7、10.5 cm×17.8 cm、厚さ約1 cm)

P. G. J. van Sterkenburg
W. J. Boot

監修 【オランダ語辞典】

(講談社、平成6・11)

財団法人日蘭学会

『実蘭和辞典』は、旧蘭印政府日本事務局長であったファン・デル・スタット(？～一九四〇)が編んだ小辞典(五九七頁)であり、昭和十七年(一九四二)に再刊されたときの「序」に、「我国唯一の蘭和辞典として聊か江湖に誇りなるものである。而してその集録せる語数約三万、冗を省き簡を尚び専ら実用を旨として編纂」されたものという。

ファン・デル・スタットが編んだ二番目の辞典は、『日蘭辞典』(一三二三頁)であるが、これは『実蘭和辞典』の「姉妹として」、五年の歳月を費して大成した画期的なものである。見出し語はローマ綴をもって、その語の発音のままを写記したものである。集録せる語数についてはわからぬが、おそらく数万をくだるまい。

拓殖大学南親会が編んだ『蘭和大辞典』(二二四六頁)は、拓殖大学の学生二十余名が元同大学の講師千秋克巳の指導をえて分担執筆したもので、これに上智大学教授ヨセフ・エーレンボスその他の数名の校閲をへて成った辞書である。戦前戦後にかけて、いささか実用に足る蘭和辞典といえば、この辞典以外になく、また古書で求めざるをえなかった。オランダやインドネシアなどに関する特殊研

究に従事する者は、この辞典とか蘭英その他の外国の辞典をひくしかなかったのである。

この『蘭和大辞典』に先だちて、「実用を主眼とする簡約なる蘭日小辞典を刊行したい」といった版元（開隆堂）の懇望により、急きょ稿を起して成ったのが、東京外国語学校教授・朝倉純孝の『蘭日辞典』（二〇三頁）である。

昭和十六年（一九四一）七月、日本軍は南部仏印に進駐を開始し、さらに同年十二月太平洋戦争が勃発するや、蘭印（オランダ領東インド）に進攻し、経営統治を行なうに及んで、オランダ語の必要性が痛感された。当時のインドネシア諸民族は、オランダ語をもって教育されていたから、かれらの内的生活にふれ、その中に入っていくにはオランダ語の知識は緊要であった。

太平洋戦争ちゅう大小の蘭日辞典があわただしく再刊もしくは新たに刊行されたのは、「東亜の共栄に寄与」するためであった。

江戸時代、オランダ語は西洋文化を学ぶ手段として、また外交用語として枢要な位置を占めていたが、維新後、その地位は一挙に転落し、概して必要性の乏しい外国語とみなされるようになり、それがこんにちまで続いている感がある。が、戦後はじめての本格的な蘭日辞典（『オランダ語辞典』）が、平成六年（一九九四）に講談社から刊行された。戦前戦後もそうだが、オランダ語は、日本の蘭学史、鎖国時代の日蘭関係、オランダ本国の学術やインドネシア関連について研究する人たちが主として学ぶ言語であった。けれど近年日本とオランダの交通がひんばんとなり、日本企業のオランダ進出などと相まって、しっかりとした内容をもつ実用の蘭和辞典の出現が望まれるようになった。そういった時代の要請にこたえて、『クラマースの蘭英辞典』をもとに編まれたのが『オランダ語辞典』（二〇七二頁、見出し語、約五二〇〇〇）であった。

つぎにオランダ語の語学書について述べておく。明治期は顕著なものはほとんどなく、大正時代からぼつぼつ現れるようになり今日に至っている。つぎにかかげるものがその主なものである。

- | | | |
|----------|-------------|-----------------------|
| 日蘭通交調査会編 | 『和蘭文典（未定稿）』 | （二〇六頁、日蘭通交調査会、大正7・11） |
| 日蘭通交調査会編 | 『蘭語文法要録』 | （一一五頁、文正堂印刷所、大正10・9） |
| 拓殖大学南親会編 | 『和蘭語文法』 | （三〇頁、小冊子、創造社、昭和18・6） |

- 朝倉純孝 『和蘭語四週間』 (大学書林、昭和11・3、昭和46・12改訂第一版)
 エー・クロイシンガ著 川崎直一訳 『現代オランダ語文法』 (三省堂、昭和19・2)
 朝倉純孝 『オランダ語入門』 (元々社、昭和31・6)
 朝倉純孝 『オランダ語常用六〇〇〇語』 (大学書林、昭和34・1)
 朝倉純孝 『オランダ語会話ハンドブック』 (大学書林、昭和50・10)
 塩谷 饒 『オランダ語文法入門』 (大学書林、昭和54・5)
 朝倉純孝 『オランダ語文典』 (大学書林、昭和58・8)
 檜枝一郎 『オランダ語基礎一五〇〇』 (大学書林、平成3・7)
 鳥井裕美子 『オランダ語会話練習帳』 (大学書林、平成6・2)
 川端喜美子 『オランダ語基本単語二〇〇〇』 (株式会社 語研、平成8・4)
 P.C.ドナルドリッソン著 石井光庸、川崎増訳 『オランダ語誌』 (現代書館、平成11・12)
 桜井 隆 『CDエクスプレス オランダ語』 (白水社、平成14・7)

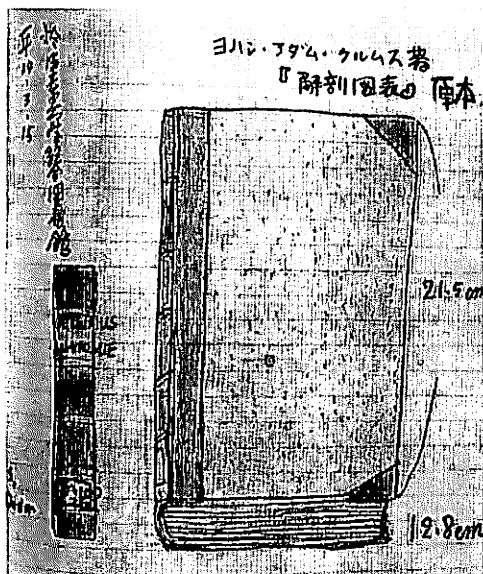
注

- (1) C. R. Boxer: Jan Compagnie in Japan, 1600-1850, Martinus Nijhoff, the Hague, 1950, p. 58
 (2) 『長崎と海外文化下編』(長崎市役所、大正十五年四月)、三頁。
 (3) 『文明源流叢書 第一巻』(国書刊行会、大正二年十月)。
 (4) 板沢武雄「蘭学の意義と蘭学創始に関する二三の問題(三)」、『歴史地理』第五十九巻第五号所収、一八頁。注(2)をも参照。
 (5) 注(4)の板沢論文、二二頁を参照し、まとめたもの。
 (6) 『通航一覽』巻百四十八。
 (7) 同右。
 (8) 『長崎叢書 増補長崎畧史 上巻 三』(長崎市役所、大正十五年十二月)、五三八頁。

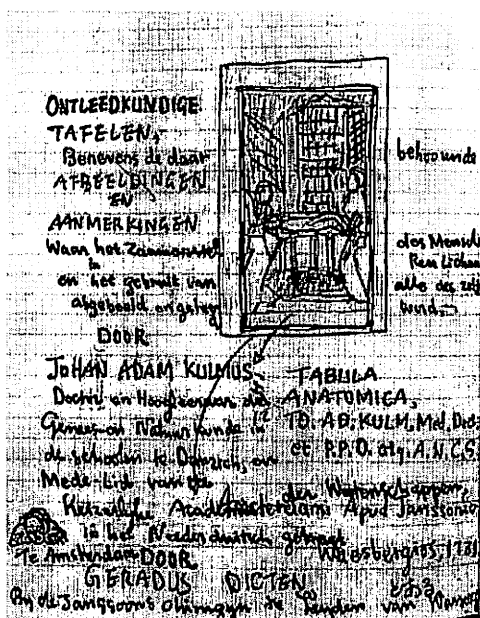
- (9) (4)の板沢論文、二三頁にも同条の全文が引かれているが、原文と多少ちがうところがあるため、日本学士院の謄写本を筆写したものをか
けておいた。なお、板沢論文には訳文はついていない。
- (10) 今井正訳『エンゲルベルト・ケンペル 日本史 下巻』（霞ヶ関出版株式会社、昭和四十八年九月）、八七頁。
- (11) 注(2)の四頁。
- (12) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』（吉川弘文館、昭和六十年二月）、四四六〜四五二頁を参照。
- (13) 『杉田玄白の蘭学事始』（日本放送出版協会、昭和十五年一月）、三八頁。
- (14) 井野辺茂雄『蘭学の起原』（『歴史地理』第二十六巻第五号所収）。
- (15) この辞典については、よくわからなう。P. Weilandが編んだ *Nederduitsch Taalkundig Woordenboek, te Amsterdam, bij Johannes Allart, MDCCIC* のことを指しているのか。
- (16) 注(13)の四一頁。
- (17) 注(13)の四二頁。
- (18) 大槻玄沢『蘭学階梯 乾』、八頁。
- (19) 中村喜代三『江戸幕府の禁書政策（下）』（『史林』第十一巻第四号所収）。
- (20) 同右。
- (21) 注(13)の八六頁。
- (22) 注(13)の八三頁。
- (23) 古賀十二郎『長崎洋学史 上巻 語学』（長崎大献社、昭和四十一年三月）、六六〜六七頁。
- (24) 同右、六七頁。
- (25) 注(13)の一〇〇頁。
- (26) 注(23)の六八頁。
- (27) 大槻文彦『和蘭字典文典の訳述起』（『歴学雑誌』第九編第三号）。
- (28) 帆足図南次『帆足万里』（吉川弘文館、昭和四十一年五月）、五八頁。

- (29) 注(13)の一〇三頁。
- (30) 注(23)の八一頁。
- (31) 注(23)の七五頁。
- (32) 斎藤阿具『ツーフと日本』(広文館、大正十一年九月)、二二七頁。
- (33) 注(23)の八一〜八二頁。
- (34) 石井孝『勝海舟』(吉川弘文館、昭和四十九年八月)、四頁。
- (35) 大平喜間多『佐久間象山』(吉川弘文館、昭和三十六年四月)、九〇〜九二頁。
- (36) 注(13)の一〇五頁。
- (37) 注(23)の九八頁。
- (38) 注(13)の一〇六頁。
- (39) 池田哲郎『東北諸藩の蘭学』(『東北史の新研究』万華堂出版、昭和五十八年十二月)を参照。
- (40) 同右、二八二頁。
- (41) 重久篤太郎『日本近世英学史 増補版(抜刷)』(名著普及会作成、昭和五十七年十一月)、二〇〜二二頁。
- (42) 同右、三四頁。
- (43) 注(41)の四〇頁。
- (44) 注(41)の四〇〜四六頁。
- (45) 沼田次郎『洋字』(吉川弘文館、平成元年十月)、二〇六頁。
- (46) 小川鼎三『佐藤泰然伝』(非売品、順天堂史編纂委員会、昭和四十七年四月)、四九頁。
- (47) 村上一郎『蘭医佐藤泰然―その生涯とその一族門流』(房総郷土研究会、昭和十六年六月)、六一頁。
- (48) 山口宗之『橋本左内』(吉川弘文館、昭和三十七年二月)、七四頁。
- (49) 福井県教育史研究室編『福井県教育百年史 第一巻 通史編(一)』(福井県教育委員会、昭和五十三年三月)、九四〜九五頁。
- (50) 同右、一三五頁。

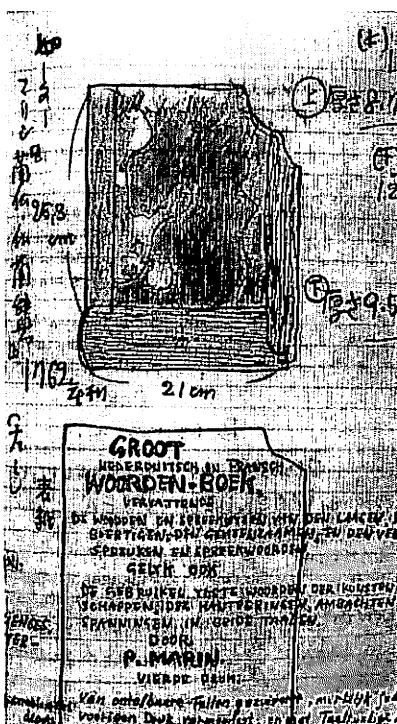
- (51) 倉沢剛『幕末教育史の研究 三』、二四七～二五八頁。
- (52) 同右、三〇六頁。
- (53) 注(51)の一六八～一六九頁。
- (54) 『佐賀県教育史 第四巻 通史編(一)』(佐賀県教育史編纂委員会、平成三年三月)、二二八頁。
- (55) 同右、二二九～三〇頁。
- (56) 『福山市史 中巻』(福山市史編纂会、昭和四十三年三月)、八〇三頁。
- (57) 『高知県史 下巻』(高知県史編纂会、昭和二十六年九月)、一〇四頁。
- (58) 惣郷正明『洋学の系譜—江戸から明治へ』(研究社出版、昭和五十九年四月)、八二頁。
- (59) 注(47)の九九頁。
- (60) 注(47)の九八～九九頁。
- (61) 注(47)の一〇二頁。



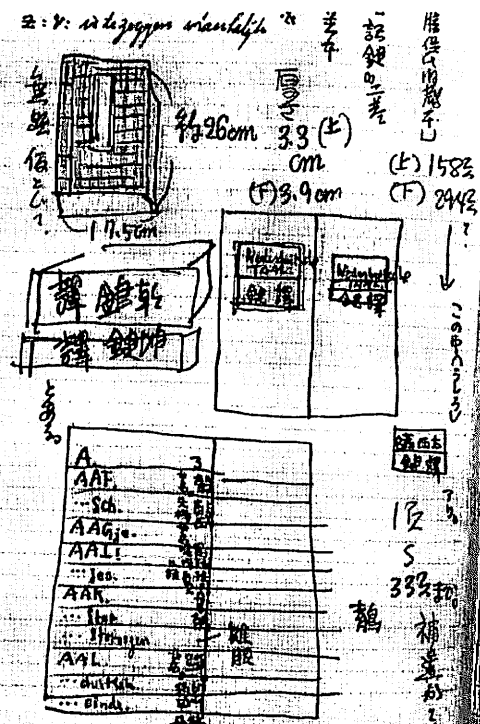
『解体新書』の原書（ヨハン・アダム・クルムス著
『解剖学表』1734年刊〔東京大学総合図書館蔵。〕



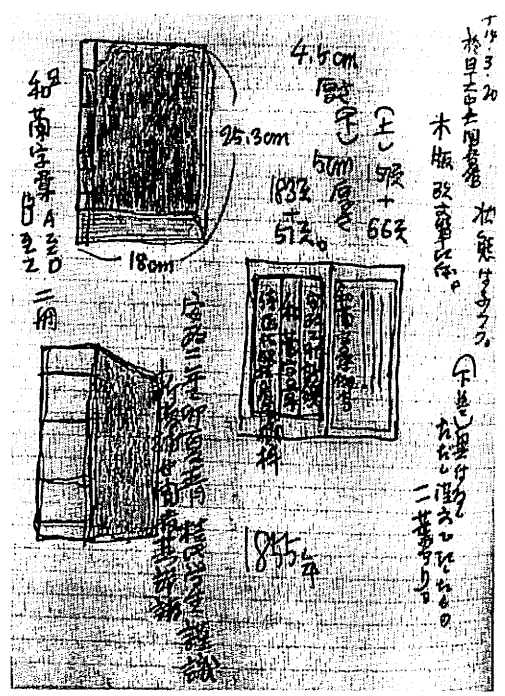
「解剖学表」の見開き



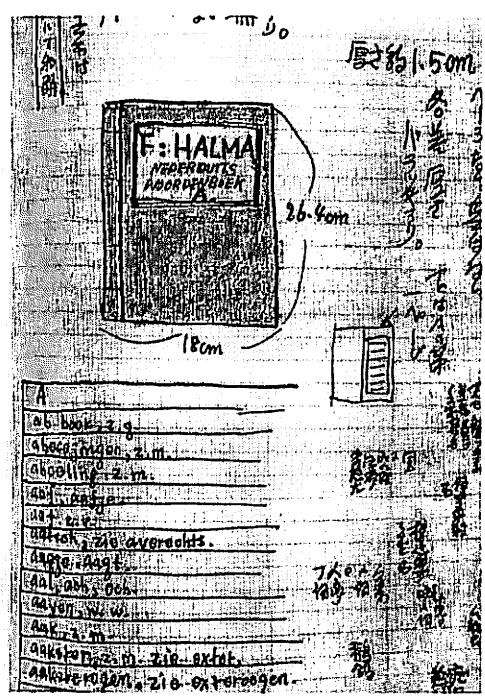
ピーター・マリンの『閻仏・仏閻
辞典』（1762年版）
[早大中央図書館蔵]



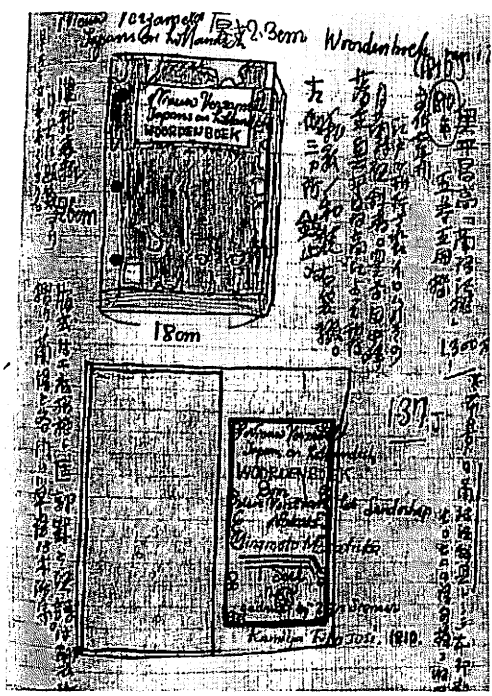
『訳鍵』（「乾」「坤」）
[早大中央図書館蔵]



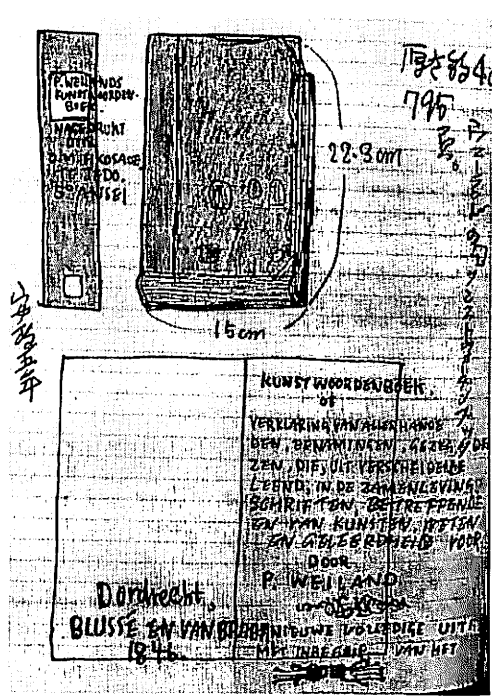
『和蘭学彙』（安政2年刊）
〔早大中央図書館蔵〕



『ハルマの蘭和对訳辞典』（1834年刊）
〔早大中央図書館蔵〕



奥平昌高編『蘭語訳選』
（和蘭対訳辞典，文化7年〔1810〕刊）
〔早大中央図書館蔵〕



P. ウェーランドの『文芸辞典』
（蘭和辞典を編むとき参酌したもの）
〔東京外国語大学附属図書館蔵〕